

熊本県文化財調査報告 第15集

江津湖苗代津遺跡

—熊本市健軍町所在—

調
査
地
点

1974

熊本県教育委員会

序 文

近年各地の土地開発テンポの早さには、目をみはるものがあります。これに伴い至るところで、埋蔵文化財保護に重大な問題を生じており、本県においてもその例外ではありません。

本県では、開発によりやむを得ず破壊される遺跡については、事前に調査を実施するよう努めております。

このたび県教育委員会は、県土木部の依頼を受け、都市河川環境整備事業による江津湖の浚渫に伴う江津湖苗代津遺跡の調査を実施し、その調査報告書を作成する運びとなりました。

調査実施にあたり、土木部河川課をはじめとする関係各課の協力に対し、また熊本大学教授国分直一氏、同助教授小谷凱宣氏及び九州産業大学教授森貞次郎氏の指導と助言をいただいたことに深く感謝いたします。

本報告書が、県民をはじめ関係者各位の文化財に対する認識と理解を深める上でお役に立てば、この上ない幸せと存じます。

昭和49年3月15日

熊本県教育長 富永俊夫

本文目次

一 序 説	1 頁
1、調査に至るまで	1
2、調査の経過	1
二 遺跡の位置及び環境	4
1、遺跡の位置及び立地	4
2、江津湖周辺の遺跡	5
3、江津湖苗代津遺跡の地形地質的環境	7
三 調 査	13
1、調査の概要	13
2、遺 構	14
3、遺 物	22
四 総 括	31
付 1 江津塘について	(緒 方 勉) 33
付 2 熊本市健軍苗代津遺跡	
出土植物遺体の調査について	(松 本 麟) 35

挿 図 目 次

第1図 1 遺跡の位置.....	2 頁
第1図 2 江津湖周辺地形区分・表層地質図	
第2図 遺跡の風景.....	4
第3図	5
第4図 熊本市地下地質断面図.....	9
第5図 江津湖北岸G区横 テストピット柱状図	10
第6図 トレンチ配置図.....	12
第7図 調査各区遺構 1	12
第8図" 2	17
第9図" 3	18
第10図" 4	19
第11図" 5	20
第12図" 6	21
第13図 遺物（土器 1）.....	25
第14図 遺物（土器 2）.....	26
第15図 遺物（土器 3）.....	27
第16図 遺物（紡錘車）.....	28
第17図 遺物（石器及び木器）.....	29

表 紙 江津湖苗代津遺跡鳥カン写真

右端水辺動物園、中央部本遺跡、左上中ノ島

図 版 目 次

図版 1(上) 遺跡鳥カン

(下) 土層及び木器出土状態

図版 2 遺構

図版 3 遺物 1 石器及び紡錘車

図版 4 * 2 土器

図版 5 * 3 牛歯及び植物種実

れ い げ ん

- 1、本書は、1973年（昭和48年）11月から翌年1月にわたり、熊本市健軍町苗代津に所在する埋蔵文化財の緊急発掘調査の報告書である。
- 2、発掘調査は、熊本県教育委員会文化課が実施し、文化課参事緒方 勉が担当した。なお調査にあたり、熊本大学法文学部国分直一教授、同小谷顕宣助教授、同佐藤伸二助手の各氏及び九州産業大学森貞次郎教授の指導と助言を受け、また九州農政局桜倉克幹氏により地質学的調査の協力を、更に東京農工大学教授林田重幸氏から獸歯についての知見を得た。これら各氏の協力に記して謝意を表する。
- 3、本書の執筆には第1、第2—1、2、第3、第4を緒方 勉があたり、第2—3については桜倉克幹氏からの一文をいただき上載した。
- 4、図面トレスについては文化課高木正文技師の協力を得た。また古文書の涉獵については花岡興輝、高野啓一両氏の協力を得た。その協力に感謝する。
- 5、本書の編集には緒方 勉が当たった。

江津湖苗代津遺跡調査報告書

(なわしろす)

一 序 説

1. 調査に至るまで

昭和47年夏、県土木部河川課より「都市河川環境整備事業」の一環として江津湖を浚渫する旨申し入れがあった。そこで文化課として、当該地域は埋蔵文化財包蔵地であるので事前に調査をするように申し入れた。再度の話し合いの後、昭和48年8月9日文化課は河川課より事務連絡を受け、事業推進のため8月16日県庁内において関係各課の打ち合せが行なわれた。文化課より緒方参事、熊本市社会教育課より鈴木喬（社会教育課長補佐）が参加、江津湖浚渫に伴う諸問題について協議がなされた。埋蔵文化財については中ノ島及び江津湖東岸、更に江津湖湖底にも遺跡の存在が考えられるので調査が必要である、などと意見が交わされた。

その後、現地調査にさきだち10月下旬、熊本市管理部用地課職員と緒方参事が土地買収完了地の現地確認、それでいよいよ現地の発掘調査を実施することになった。（緒方）

2. 調査の経過

調査予定地は未買取地の一部を残して、ともかく昭和48年11月9日から現地調査を始めた。先ず、未買取地との境界確認である。前以て熊本市用地課に照会した通り、測量図と現地との照合からはじまった。スコップ、移植ゴテと数台の一輪車は当日運んだ。いよいよ低湿地の困難な調査がはじまるのである。

調査対象地とされているのが約30,000m²である。二ヶ月余りの短期間と、この調査態勢では到底全域調査はのぞめない。その与えられた条件の中で如何に効果的に調査を進めるか、どこで調査を縮めくるかが重要になってくる。そのため第6団の如くユンボーにより縦横のトレントチを入れることにした。

11月12日 いよいよユンボー搬入。そして作業開始。幅80cm、深さ約1mの掘開も快調に進む。3日たらずで東西方向に2条、南北方向に5条の溝を掘り上げた。その間土層觀察と遺物出土状態に注意した。目まぐるしい忙しさである。中央附近の湖よりの間に設定した東西トレントチから弥生式と思われる土器片數片を発見した。そこで重点をこにしほる。続いてユンボーにより5×10m位の表土はぎを行なった。（後にここをA区とした。）

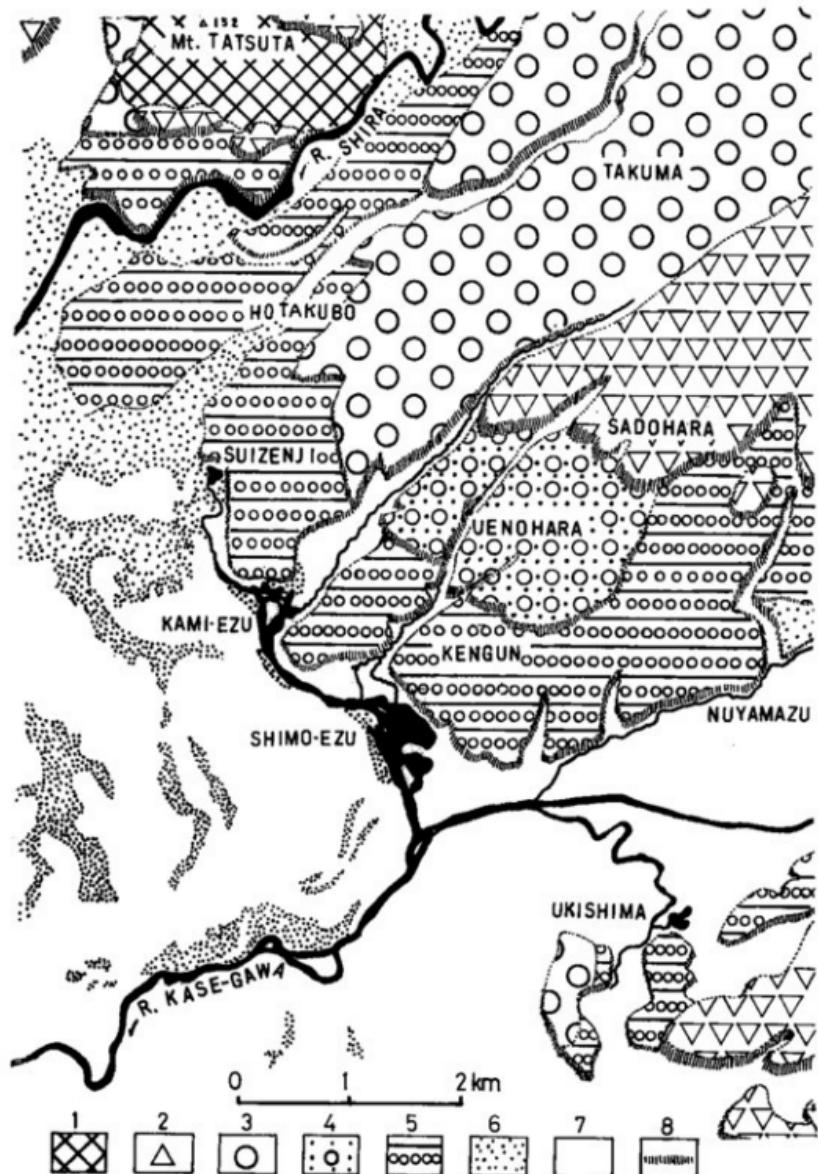
11月19日 A区より早くも成果があがる。三角形石包丁の発見である。かねて見なれない形で包含層での発掘資料は貴重である。周辺には夜臼式土器が散乱、それと共に伴するものとみられる。層位的には第3層に相当する。

11月20日 発掘と平行して測量をはじめた。縮尺 $\frac{1}{200}$ とし、ほぼ発掘地域が平板一面におさ



第1図1 遺跡の位置 (周辺遺跡)

- 調査地点
- 1 江津湖東岸遺跡
- 2 上江津湖遺跡
- 3 江津中ノ島遺跡
- 4 健軍遺跡群
- 5 神水遺跡
- 6 健軍神社遺跡
- 7 上ノ原遺跡
- 8 八幡塚遺跡
- 9 二石遺跡
- 10 重富遺跡
- 11 招山津貝塚
- 12 招山津遺跡
- 13 古瀬遺跡
- 14 カキワラ貝塚
- 15 下六島遺跡群
- 16 桑寺古墳
- 17 桜島遺跡
- 18 上官城・刺原遺跡群
- 19 甘木貝塚



1. 基盤山地(安山岩類) 2. AT面(阿蘇第4火砕流) 3. TK面(託麻砂レキ層) 4. OH面(? 砂レキ層)
 5. HO面(保田畠砂レキ層) 6. Az. 阿蘇層状地・自然堤防砂レキ層) 7. A面(沖積低地泥砂層) 8. 岩・急斜面

第1図2 江津湖周辺地形区分・表層地質図

まる模様である。

11月27日 どうしてもこの様な低湿地の調査は不なれで、調査経験の乏しさもあって土になじめない。新たにG区東側に土層観察用のテストピットをあける。2×2m位、土層は4層に分離される。第4層は砂層で、環状のいわゆるグライ層である。これにより明日からの調査も一つの指針を得ることになる。

11月30日 再度ユンボーを導入。各調査区を10×10mとして区切り、A区の北側にB～F区を設ける。またA区の東側をG区として、ユンボーにより表土はぎを行なう。此の間約2日間。

12月5日 B区の発掘すむ。期待の木器（第17図）が発見さる。土層の状態からして第2層下面の遺物と判定。第3層から文様のある紡錘車一個あらわれる。

いよいよ12月になり師走である。中旬に至り、寒気がつたり霜の日が続く。湧水のため霜柱の成長がよく3cmに及ぶ。排水と共に毎日午前中は霜柱の取除きが日課となる。

12月14日 C区より動物の臼歯2本発見、専門的になるとその判定に戸惑う。隣接する水辺動物園竹田園長に問い合わせしころ、草食獣のものと判明。後程牛の臼歯と同定された。B区の遺物出土状況を実測。あれこれと飛びまわることになる。

12月17日 さきのA区第3層を掘り下げ、更に石包丁破片一個発見する。

12月19日 B区東側に良好な遺物包含層が期待され、B区東側の掛土除去にブルドーザー導入。あわせてH区発掘準備にかかる。C区には数条の溝のあることが知れる。

12月25日 町ではクリスマスである。前日は雪、今日も寒風きびしく、師走の風はそぞろ身にしみるものがある。H区第2層発掘。他の調査現場の助言も要請される。凍てつく中手早にA～F区東側土層断面を実測。

12月26日 快晴のため結氷、霜柱の成長もよく、また出水のため作業困難。地較の乾いているG区を精査。第3層上面に弓なりになった焼土を発見。この遺跡が生活址、住居址であることは間違いない。しかも弥生前期のものといえば尚更である。27日で一まず今年の調査を中断。

1月7日 調査再開。寒気の日は続く。また出水のため足場の悪い調査の日々である。霜だけ、ぬかるみは処置なしである。

1月10日 数日来C区の溝の発掘にかかる。桃の種実が出てくる。C区の2'層からである。

1月16日 D区の4号溝を掘る。中には植物遺体が多量にあり、瓜類などの種も出てきた。

1月18日 H区西側より牛歯2本発見、第2層下面である。

1月24日 H区中央にも東西方向の小溝あり、溝中から夜臼・板付式土器があり、また扁平片刃石斧1個発見さる。

1月29日 B-D区にかけて1～4号溝と別に、それと直交する7号溝のあることが知れる。調査期日も迫り、部分発掘で割愛することになる。

1月30日 A、B区を清掃、入念に第3層を削った結果、どうも岡区にまたがる方形プラン

の遺構がある疑い濃厚となる。住居址と考えられるが調査期間が切迫し、それ以上発掘出来なかつた。

以上大まかな調査の流れである。遺構として、B区に6号溝、土塙があつた。E区及びF区では、層位別遺物をわけて取上げるほかなかつた。

本調査は低湿地のため湧水に禍いされることが多く、又調査時期が冬場であったこともあるて、霧柱、雪、寒風の悪条件は如何ともしがたく、調査効率のダウントするのもやむを得なかつた。調査延日数68日、補足調査もあって最終的現場撤収は2月4日であった。

二 遺跡の位置及び環境

1、遺跡の位置と立地

調査対象地域は熊本市の東南部に位置し、行政区分上熊本市健軍町苗代津（なわしろづ）一部が同町長田に属する。それは国土地理院発行五万分の一（昭和42年編集）「御船」図幅北より約14cm、西より0.3cmのあたりに相当する。

水前寺成趣園に発した水前寺川は東南に流れ、周辺一帯の豊富な湧水を集め、また藻器掘などの小川をも併せて江津川、更に加勢川となる。また右岸堤防（江津塘または大名塘ともいう）は上江津湖、下江津湖の二大遊水池をつくる。この江津川の清冽な湧水は古くから水前寺苔、（生）江津苔の産地として広く知られるところでもある。

本遺跡は第1図にみる如く、下江津湖北岸に接してひろがっている。託麻台地上ノ原附近を流れる小流庄口川は、泉ヶ丘の西側を南流し下江津湖にそそぐ。本遺跡はあたかもその三角洲に相当するところに占地する。今ではこの附近一帯は都市化により大きく変貌し、元の地形の面影を止めないほどに宅地化が進んでいる。古地図によると遺跡の北側、水辺動物園のあるあたりは沼沢地であったことが知れる。

調査地区の現状は全体ながらかな水田で、高低差はほとんどみられない。標高5.2m、1月



第2図 遺跡の風景対岸より

枯水期ですら江津湖水面との比高差は1mに過ぎなかった。またこの付近には到る處に自噴水があり、清水を湧出している。このようなことから、湧水がかえって調査の障害となり、連日排水作業を必要としたことは言うまでもない。

江津湖に隣接するこの一帯は雨季には例年浸水、冠水地帯もある。このような特異な遺跡立地は、或は水中遺跡、泥炭地の遺跡ではないかなどとの興味がもたられ、この調査に期待されるところでもあった。

(緒方)

注 宝永6年 井澤長秀「肥後地志略」江津館、水前寺苔の記載見ゆ。

参考文献

江津湖開発に関する報告書 熊本開発センター 昭和47年

2、江津湖周辺の遺跡(第1図1)

江津湖周辺、殊にその東岸一帯には縄文・弥生そして古墳期の先史時代各期の遺跡が存在する。また地理的立地の好条件は奈良平安期に肥後國府(託麻)をはじめ、国分寺などの政治的建造物の存立するところとなる。これらの各遺跡については「熊本市遺跡地図」及び「熊本市^(註1)東部地区文化財調査報告書」にくわしい。そこでこの中から本遺跡に間連深い先史時代遺跡に^(註2)について要約簡記すれば次のとおりである。

上ノ原遺跡 主として縄文晚期初頭の遺跡である。昭和45年夏熊本市社会教育課により発掘^(註3)調査された。この遺跡の調査で注目されたのは、住居址床面土のWalter-Separation法による植物性遺物の採集である。中でも二粒の炭化米は縄文農耕論に実証的資料を提供した。各調査区から多量の縄文晚期土器、土偶、有孔土製品、磨製石斧、扁平打製石斧等出土。遺物の出土範囲も広く、縄文の大遺跡とみられる。そこは、苗代津遺跡の上流約1.5kmの地点である。また侵蝕谷一つ距てた健軍神社境界にも同様の遺跡があり、縄文晚期土器を出土する。

上江津遺跡 上江津湖東岸は弥生式土器石包丁等の石器類、縄文各期の土器の出土することで知られていた。たまたま昭和40~41年の上江津湖浚渫により、堆土中から多量の土器が採集



第3図 同左つなぎ 右端中ノ島・左端調査地域

された。浚渫土中の土器類は長溝部落付近の再堆積土中の発見であり、元の包含状態は不明であった。リンゴ箱3杯に及ぶ遺物には、黒川一夜臼式（縄文晩期）とみられるものが最も多くその中には組織痕土器もみえる。ついで弥生の各期におよび、中期の腰棺片、後期の重弧文土器、ジョッキ形土器片があった。降って肥後國分寺瓦がみられる。また、上江津湖東岸の神水には弥生中期の腰棺群があり、数箇所に群をなす如きである。

江津中ノ島遺跡 苗代津遺跡とは一衣帶水、江津湖の水を距てた隣接の遺跡である。島の西と北側にかけて縄文晩期～弥生前期の土器を出土する。

中ノ島の北東にすでに消滅した小島があったことが古地図に見える。地元漁師によると「太郎ヶ島」とのこと、前回下江津湖浚渫により島は消滅。関係者等の話によると浚渫の際土器を多量に出土したことが判明し、また浚渫土の大部分は水辺動物園の地上げに使われたという。現に同園地から夜臼・板付式土器の出土するのは、太郎ヶ島が遺跡であったことを示している。

江津湖東岸遺跡群 この中に苗代津の遺跡も含まれる。顯著な遺跡として、泉ヶ丘小学校校庭出土の「山ノ寺式土器」と広木及び水源地遺跡がある。広木では方形周溝墓1基が発見されおり、周辺にも石棺の出土していることから群としての存在が考えられる。水源地遺跡は戦国期の陣内城本丸跡にある。昭和48年工事の際発見され、調査が実施された。縄文（御領期）^(注4)住居址1、古墳期住居址1、方形周溝墓（古式土師出土）2、円形周溝をもった墓（古墳後期）5、土塙墓2と多種多様の遺構が発見された。苗代津遺跡と泉ヶ丘、広木、水源地の各遺跡とは侵蝕谷一つ離れた目と鼻の先である。ただ遺跡立地が異なり、苗代津遺跡のほかは江津湖を望んだ比較的高標な高台に占地する。

このように江津湖周辺には重要遺跡の数が多い。少し離れると、西無田では弥生時代の腰棺、^(注5)その副葬品とみられる石包丁が発見されている。江津湖の下流には、かっての自然堤防とみられる重富遺跡から古式土師器が出土しており、田迎町二石では弥生前期末亀ノ甲タイプの土器が発見されている。加勢川川底の御幸町八幡塚でも多量の弥生前期の土器が出土している。^(注6)

（緒方）

注1 熊本市文化財の歴史—熊本市教育委員会、1972刊

注2 熊本市東部地区文化財調査報告書—熊本市教育委員会 昭和48年

注3 熊本市健軍町「上ノ原遺跡調査報告書」—熊本市教育委員会 1971

注4 平岡勝昭「泉ヶ丘発見の山ノ寺式壺について」—熊本史学第19・20号 昭和35年

注5 注2に同じ

注6 昭和48年夏、熊本市社会教育課発掘調査

注7 熊本市史 昭和4年刊

注8 志方正和「重富出土の土師器について」—九州古代中世史論集 昭和42年刊

注9 乙益重隆「南九州の弥生式土器」日本考古学講座4 昭和30年刊

3、江津湖苗代津遺跡の地形地質的環境

本遺跡は、北緯32度46分15秒、東経130度45分（熊本市健軍町237）に位置している。遺跡における深さ1mの試坑の土層断面は第3図、地形、地質的環境は第1、第4図にそれぞれ示すとおりである。これらの図表から、事實を読みとり、当該遺跡の自然立地、地形地質的環境の変遷を類推していただけると思う。蛇足のそしりを免れないが、以下に説明を加える。

（ア） 遺跡の自然立地

遺跡は、熊本市街地から有明海岸まで広く発達する白川氾濫原の東端部にあって、上江津湖北岸の標高5mの低湿地にある。当該遺跡の北方200m、東方400mには、数mの比高の段丘崖を経て、さらに東北方背後は阿蘇カルデラまで連なる火山性台地が発達している。この台地は託麻原台地と呼ばれている。江津湖をはじめ、水前寺、八景水谷などの池は、阿蘇西麓にひろがる広大な火山性台地の西端崖下にあり、台地の地下にはぐくまれた地下水によって涵養されている湧泉である。これらの湧泉は、季節的にも殆んど変化なく、古くから安定有能水源として知られている。これは、河川水が連續干天や連続降水の影響を受けやすいのとは、対照的である。安定有能水源であるこれらの湧泉は、後述するとおり、約2万年前のウルム最大海退期に嘔嘔の声を挙げ、繩文海進によってほぼ完成し、湧水機能は弥生小海退から現在まで大きい変化はないものと考えられる。当該遺跡に南接する江津湖は、現在の日湧出量は90万m³であり、これらの湧泉群の中で最大規模のものである。この安定有能水源の存在が当該遺跡の立地を規定していると考えられる。ことに狩猟生活もしくは焼畑農業から、水田農業へ指向しようとする人々にとって、洪水に見舞われず、しかも良質、大量の水の供給地である当該区域が大魅力ある土地であったことは充分想像できる。

（イ） 地形とその形成過程

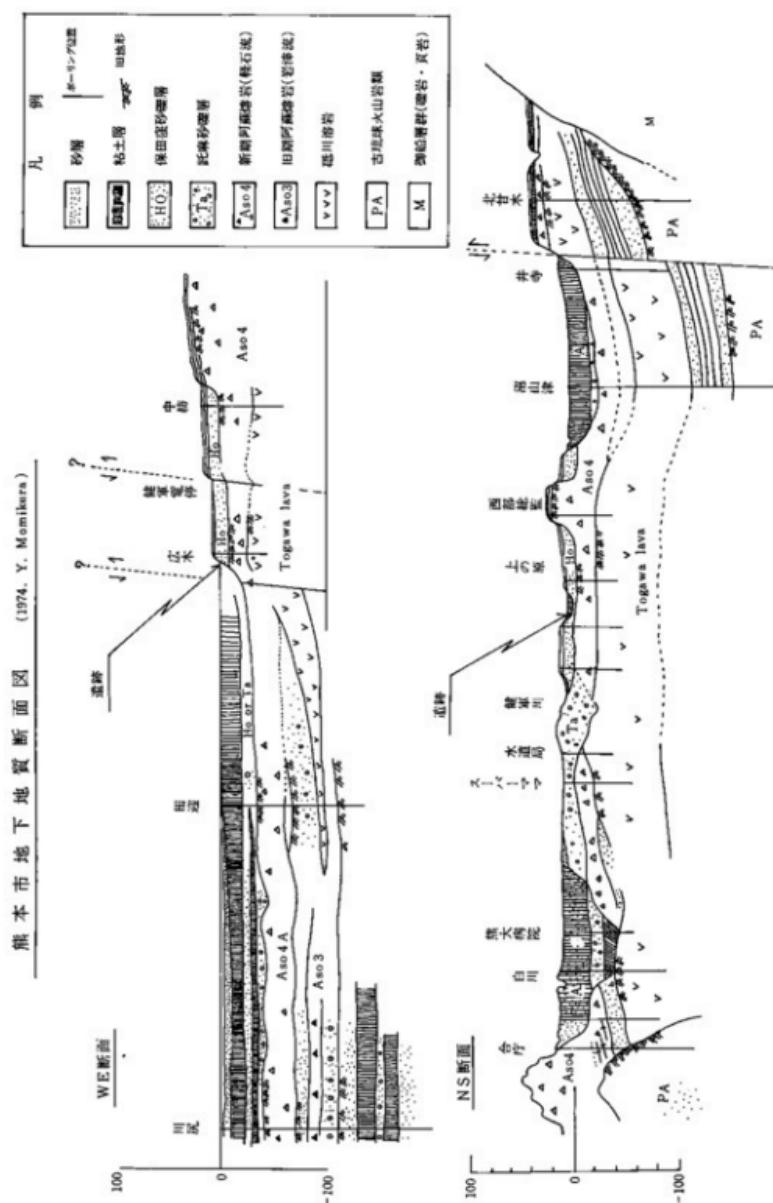
遺跡およびその背後の地形の大勢についてはすでに述べたが、その詳細は第1図に示すとおりである。この図は、国土地理院発行の5万分の1地形図（熊本・御船）を基図として、最近撮影の航空写真を実体視して作成したものである。背後託麻原台地のうち、健軍電停から自衛隊西部方面監部にかけての部分は、昭和初期からの開発により地形保存が著しく悪くなっているため、明治34年測量明治44年部分修正の陸地測量部2万分の1地形図（砂取）を参照した。第1図から判るとおり、託麻原台地は高度、開析度からAT面、TK面、HO₁面、HO₂面の4段に細分され、白川氾濫原はA₁面およびA₂面に区分される。

AT面は、新期阿蘇溶岩の堆積原面に相当し、山地を除いて最も高い地形面を形成している。遺跡背後の託麻原では、新外、小峰から戸島山にかけてその原面が保存されており、標高は35mから65mに上り、低地との比高は、20~40mとなっている。新期阿蘇溶岩は、阿蘇カルデラ形成と密接な関連をもつ火山活動の産物で、九州一円に広く分布している。岩相はいわゆる軽

石流堆積層で、軽石・火山砂・火山灰および異質岩片^aの集合体からなり、谷埋積の部分では溶結して、黒曜石の縞をもつ溶結凝灰岩となっている。この地層の堆積年代は ^{14}C から 33,000 ± 3,000 Y.B.P (Gak 282) である。AT面は、台地面としてはうねりに富んでいて必ずしも平坦ではない。これは、堆積後の侵食や変位によるよりもむしろ原面そのものが、うねりをもっていた場合が多いと考えられる。それは、火山碎屑岩流の噴出、運搬のエネルギーが熱雲はよっているため、もともと野を越え、山を越えて堆積し、堆積原面が水成堆物と異なり埋積旧地形を反映するからである。堆積層の表層は概して風化変質がすすみ、軽石が粘土化し、角礫まじり淡紅色～淡褐色粘土層となることがしばしばある。原面上にはチョコレートローム、阿蘇新期ローム、沖積火山灰などが載っている。

TK面は、大津町陣内を扇頂として有明海に向って扇状地帯に発達した砂礫の堆積面（式・鶴田1958）で、AT面を深く切り込んだウルム最大海退期の白川によって形成されたものである。託麻原では、熊本工業高校（標高20m）から京塚、小山御領（標高60m）にかけて発達しており、低地との比高は、10～30mとなっている。TK面を構成する地質は拳大～人頭大（ときには巨礫）の安山岩円礫からなる淘汰のわるいルーズな砂礫層で、託麻砂礫層（宮本ほか1962）と呼ばれている。託麻砂礫層は、AT面を深く侵食した谷を埋めて堆積しており、その厚さは20～30mに達する部分もある。水前寺・江津などの湧泉は託麻砂礫層の厚い部分にある。換言すれば、ウルム最大海退期の白川が、新期阿蘇溶岩（Aso 4 火砕流堆積層）を深く切り込んで、当時の谷底が、火砕流下部溶結相もしくはさらに下位の砥川溶岩などの有能帶水まで達した部分に、水前寺や江津の湧泉が生じたと云える。すなわち、当該遺跡の立地に重要な役割を果たしていると考えられる江津湖の発生は、託麻砂礫層と密接な関連をもっているのである。託麻砂礫層の上位には阿蘇新期中部ローム層が整合的に重なっており、ローム層中の ^{14}C から、その堆積年代は 19,600 ± 550 Y.B.P (Gak 818) とされる。

HO面は、TK面の周囲に 2～3段附隨する標高 10～20m の平坦な段丘面で、保田窪から健軍にかけて発達している。この段丘の構成地質は安山岩大礫を時に含む凝灰質砂層からなっている。砂層はクロスラミナがよく発達し、白ないしオレンジ色の軽石礫をよく含んでいる。段丘上面には阿蘇新期上部ロームを整合的に載せており、その年代は、松橋粘土層： $^{14}\text{C} 15,350 \pm 320 \text{ Y.B.P}$ (Gak 494) と阿蘇新期中部ロームの間と推定されている（1971古川・穀倉）。この段丘は、健軍神社、上ノ原、熊本第二高校のある HO₁面と、健軍商店街、熊本商業高校、熊本県庁のある HO₂面に細分されるが、その詳細は今後の検討に待たねばならない。いずれにしても、ウルム最大海退期から島原海進（柴崎・有明海研究グループ1965）にいたる間の何回かの比較的高位海面停滞期の産物と考えられる。HO₂面の低地との比高は、健軍川以南では数mであるが、西北するにつれて次第に減じ、国府・九品寺では比高が認められない。これは、ウルム最末期海退によってできた段丘崖が、繩文海進と共に伴う白川の運搬力の後退により、



第4図 熊本市地下地質断面図

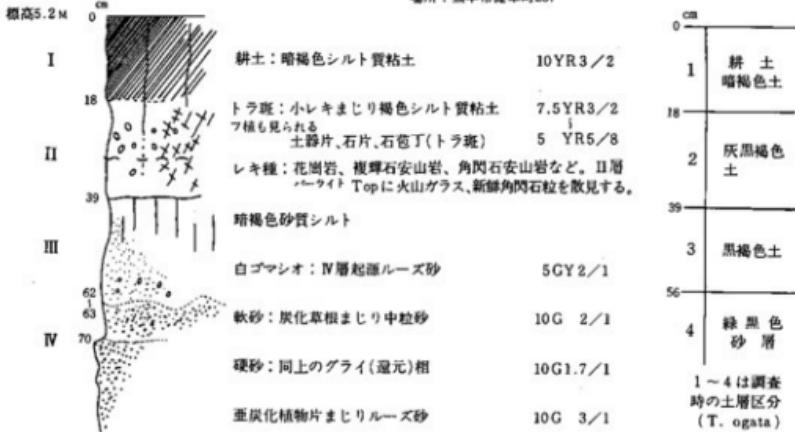
河道沿いの段丘崖がうめたてられたことによると推定される。

A面は、いわゆる沖積面で、低平地を形成し、白川氾濫原の名で総称されている。A面は標高5m前後もしくはそれ以下で、有明粘土層の堆積面である。有明粘土層の基底年代は¹⁴Cにより10,220±190Y.B.P.(Gak 1930)とされている。一方、柳島遺跡(上益城郡益城町島田)沖積火山灰層の第2黒土層から縄文前期の土器がでており、同層準産の炭が9410±125Y.B.P.(N-1730)と報告されている。これらのことから、有明粘土層は縄文海進の産物であると言える。A₂面は沖積平野の中の微高地で、A₁面より1~2m標高が高い。この微高地は主として細礫もしくは砂層からなり、現河川の扇状堆積物もしくは自然堤防である。A₂面は縄文海進時の旧津もしくは、弥生小海退期から現在にいたる河道にあたっている。九品寺→八王寺→長溝→所島や、田迎→田井島→笛田、十津寺→近見町→川尻などはその顕著なものである。

苗代津遺跡の土層柱状は第I図のとおり4層に区分される。第I層は耕土で乱されたシルト質粘土からなる。第II層はグライ層の酸化したトラ班帶で、小礫まじりの褐色シルト質粘土からなっている。本層中には火山ガラスや自形をした新鮮角閃石粒を散見でき、腐植の集積も見られるところから、上の原遺跡の第III層、柳島遺跡の第II層上部に対比できる。第III層以下は現在では地下水水面下にあって、グライ相を呈している。III層は第IV層のあらい出しのルーズ砂からなり、流水域にあったと思われる。第IV層は、亜炭化した湿性植物を含むルーズ砂で、縄

江津湖苗代津遺跡(水辺動物園裏) G区横テスティット柱状

観察: 12, 道 '73 Y. Momikura
場所: 箕面市龍軍町237



第5図 江津湖北岸(水辺動物園裏) G区横テスティット柱状図

文海進時の海に近い湿地と思われる。第II層に見られるレキは、その瘤状、レキ種からみて、古代人がもたらしたものと考えられる。

なお、弥生時代も江津湖は現在の位置にあったが、浮島の集合状態で、地下水位は現在より低かったと推定される。海面が現在より、やや低く、かつ江津湖南岸に堤防がなく、約1km西側の自然堤防までは、排水能力が充分あったものと思われる。

(九州農政局 稲倉克幹)

参考文献

熊本市教育委員会1971、熊本市健軍町上の原遺跡調査報告書

経企庁・熊本県 1958、1/5万熊本地形・表層地質・土じょう図および説明書

有明海研究グループ 1965、有明・不知火海域の第4系



第6図 トレンチ配置図 点線は推定による造構のひろがり



第7図 調査各区造構 1

三 調 査

1、調査の概要

調査の経過の中にすでに述べた如く、各調査区の設定に先立って数条のトレンチ（第6図）をあけた。即ち、東西方向に2条、南北方向に5条の溝をユンボによって掘った。これらの各トレンチは、調査対象地域の全域をカバーする如くに設け、発掘にあたり前以て準備する余裕もなく、隨時に臨機応変に処理した。

ついで各トレンチの土層及び遺物の観察である。それらの観察結果に基づき調査に適する地点を選定した。A区の決定である。調査区の各枠は10×10mとし、各辺が東西又は南北方向になるように設定した。はじめに江津湖の水流と直角方向に、遺跡の拡がり乃至は地形の傾斜の状況をみるためにA区の北にB区、そしてC、D、E、Fの各調査区を設けた。一方A区ならびにB区の発掘が進むにつれて、東西方向にも遺物の濃厚な分布が予想されるに至り、A区の東にG区を、B区の東にH区を設けた。

本遺跡の標準的な土層層序を確認するためG区の東側に2×2m、深さ約1mのテストピットを開いた。この土層についての専門家による所見は第5図及び二一3に述べられた如くである。第1層耕土である。この層は水田耕作における耕床で約18cm、暗褐色粘土質で本質的に第2層と変りないものかもしれない。第2層は約21cmで灰黒褐色を呈し層中に細礫を含んでいる。上面には陶片の混入を見る。下面には須恵器、土師器があり、弥生後期の土器片、及び第3層と同一の夜臼・板付式土器片をも包含している。第3層は2層の下約17cmで黒褐色の粘土質である。第2層との界面は明確で、場所により土の色調も異なり鉄分銹着し赤色のトラ班を生ずる。この層は、夜臼・板付式土器の包含層である。また土層の上から2層より古く3層より新しい層を2層とした。第4層は砂層で浸水状態のため緑黒色をしており、いわゆるグライ相を呈する。この層から文化遺物の発見はなかった。

土層中における遺物の包含状態から第3層は重要と考えられるので、更に説明を加えよう。この層は場所により色調に濃淡の差があり、黒褐色乃至赤褐色を呈する。殊にA、G区とB区の南側は水酸化鉄の銹着により土色が赤くなり、高師小僧の発達がよかつた。それは古代製鐵址ではないか、と見まちがう程の鉄分の沈着状況であった。出土する遺物は3層上面に面的な拡がりをみせ、そこが或る時期における生活面であることを示していた。G区における焼土の発見は更にこのことを裏付け補強することになった。

第3層から発見される土器は、様式分類上夜臼式、板付式とされるもので、亀ノ甲タイブとして呼ばれているものも含まれている。これらの諸形式の土器は層位的に分類することは困難で、同一層位における共伴出土とみるほかない。第2層の弥生後期、須恵器及び土師器

の破片が包含されるのとは甚だしく異なっており、上層の堆積の年代が違っているものであろう。

B区における木器及び牛の臼歯は発見時の土層層序は第2層の下面であった。B区及びH区の溝には、その溝中に夜臼・板付式土器が発見されたが、溝の埋没土は明らかに第2層の土であった。それぞれ5、6号溝とせるものである。C区では数条の溝が発見され、それぞれ1～3号溝として記録した。ここでは土層層序の上からA、B区と異なり第3層は殆んど失なわれていた。第2層よりいく分古い層として2'層とした。年代的に第2層と大差ないものの如くで、D区ではこの層より須恵器破片を発見した。この層の色調はくらく、第3層と峻別しにくい状態であった。C区発見の牛の臼歯は第4層直上の2'層から発見された。D区では第3層が削られていて存在しなかった。4号溝はD区を斜断し、溝は2'層を貫き、大部分第4層に掘込まれていた。7号溝はB-Eの各区の西側を南北に走り、1～4号溝と交わっていた。E区では土の色で溝の流れが確かめられたが、調査期間に余裕なく、南及び北端は未掘に終った。A、B区にまたがる住居址、それについても確認に止まり精査が出来なかった。

(緒方)

注 高師小僧 管状・樹枝状の褐鉄鉱の团塊、地下水中に溶解している鉄分が土壤中あるいは粘土中の種物体を交代して生じた水酸化鉄の沈殿物、 平凡社 昭和45年刊 地学事典による。

2、遺構（第7図～第12図・図版2）

溝

1号溝はC区にあり、中央部東側にはじまり斜めに西へ向かっている。溝幅の広いところで120cm、狭いところで75cmをはかる。断面はU字形をなし、比較的浅い。7号溝と交錯する。溝はC区より更に西へ向かって延びるが、C区で約8.5mを発掘、それより以西は発掘しなかった。溝の西側断面により、その土層層位を観察すれば、第1層は耕土で暗褐色を呈し、深さ約20cm。ついで第2層灰黒褐色の獨得の色あいである。ここでは第3層を欠いでおり、続いて第4層の砂層に至っている。この第4層からは今のところ文化遺物の発見はない。1号溝は第2層下面より、第4層に掘込まれている。溝中には塊状をした黒色土と第2層と同質の土が分離した状態で入っていた。溝底まで深さは中心部で約70cmである。溝中には木片・竹片のほか打製石斧や夜臼・板付式の土器片もあったが、土層層位の上からおよその年代判定が出来よう。層位的には第2層よりさかのぼることになるが、第2層の形成と関連深く、ほぼ同時期のものとみたい。

第2号溝は1号溝の南にこれと平行にはしる。幅約30cmの浅く小さい溝である。溝に埋没せる土はC区第2層と同一であった。溝中から植物の種実が発見されている。

第3号溝は2号溝の南側を東西にはしる。溝幅もはじまるあたりがふくらみ70cm、中央部に至り40～50cmとなる。C区の発掘地域で約7m西流する。溝断面は他の各溝と同じくU字溝と

みてよかろう。溝中に発見される遺物は土器細片が多く、それは第2層乃至溝形成時の擾乱混入であろう。主としてB区第3層の土器と同一とみてよい。溝断面観察でも第2層の土と同じであった。

第4号溝 溝の大半はD区を東より西に斜断し、一部がC区をかすめている。溝の形が特異で、東から1.5mのあたりで一旦くびれ西に向かって延びる。東側で溝幅約100cm、くびれ部で約40cm、西側で幅130cmと広くなる。深さはくびれ部で浅くなり地表下約60cm、他の部分で約70cmである。溝断面はゆるいU字形をしている。この溝から少量の夜臼・板付式相当の土器のほかに、土師器や須恵器が発見された。溝の形成が弥生時代をさかのばらないことは、遺物の上からも確実である。溝中の黒色土中には土器のほかに、植物性遺物を多種多量に採集することが出来た。木片、竹片のほか植物種実として瓜類などの栽培植物がみえたことは、注目に値しよう。溝の層位的状況はD区東側断面（第12図）に記したとおりである。即ち、第1層耕土で約15cm、第2層の灰黒褐色土は薄く5~6cmである。第2層の下に統いて2'層がある、黒色土に水酸化鉄のトラ班が入る。深さ約20cm。統いて地山とみられる第4層の砂層に至る。溝は第2層下面より落ち込むが、溝中に部分的に黒色土の塊りが入る。またC区西側での断面観察によると、3層より落込む如くで溝上面に薄く5cm位のトラ班入りの黒色土がひろがる。その下溝底まで2層と同類の土層になる。2'層の物理的・化学的成因には注目すべきだが、実質的に2層とあまり変わらないものとみられる。

5号及び6号溝 B区とH区の境あたりで、区切れているので別にした。流れの方向からして本来同一の溝とも考えられる。5号溝はH区のほぼ中央を東流する。溝幅50~70cm位のU字形の溝である。溝中の遺物には夜臼・板付式土器があり、それは掘開時周囲の遺物の混入であろう。溝の中央近くから扁平片刀石斧が発見された。これも同様の解釈が成立つであろう。溝断面での土層観察では、第2層と同一土壤組成をしていた。溝の方向が1~4号溝と反対の方向を向いているのは、この溝の特徴として注目される。また、溝中から植物性遺物が少量発見された。

6号溝は5号溝の西側延長線上にある。溝幅40cm内外の小溝で中央に孤立し、2m30位直線状に延びている。土色及び土壤組成の上から第2層と変りない。中央で孤立しては、溝の用をなさないのであるから、前述の如く5号溝と連結していたものとみられる。2層の土と溝中の埋土が同色のため見分けることが出来なかったと考えられる。第2層中途から掘込まれたとすれば5、6号の溝はつながることになる。

7号溝はC、D区を南北に流れる溝で、1~4号の各溝と切合っている。溝幅2m前後で、現地表から溝底まで約70cmの深さで断面U字形をしている。溝の土層断面は上面にトラ班のある黒色土がひろがり、下面には灰黒褐色土で埋まっている。この状態から1~4号溝よりいく分古いことが考えられる。溝中より打製石斧、夜臼・板付式土器、土師高壺が発見され、また

布目瓦一片も黒土中より発見された。瓦は奈良時代のものではないかと考えられる。しかし、活用中の溝に後代（奈良）の瓦片が混入沈積した、とも考えられ、にわかに断定出来ない。

以上取上げた溝のほかに、第7図・第12図にみる如く、A区とG区の南側を東西に横切る、8号溝がある。溝幅約120cmで最も大きい。この溝については現在近くの老人の中にはその存在を知っている人もいて、比較的最近まで使用されていたことが知れる。溝底U字形をなしているが、部分的に凹凸がはげしい。第11図にA区東側の土層断面を示したが、水田の畦近くで第1層と第2層の界面も不鮮明であり、溝の入り込み状態もすっきりしなかった。溝そのものが近年まで使用されたとしても、8号溝の掘開は他の溝と同様古いことも考えられる。

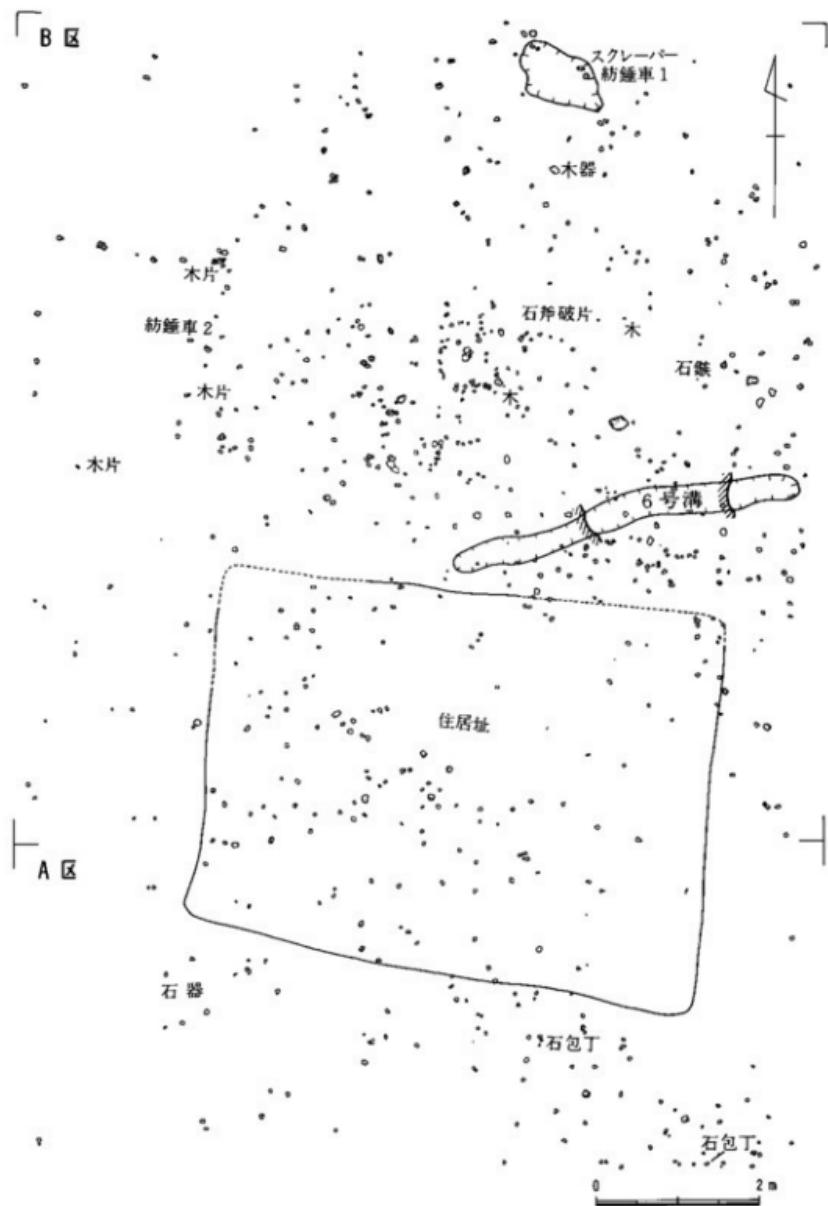
住居址 A区の第3層は黒色土に鉄分の沈着が多く赤く彩られていた。金属鉄ではないか、と疑われるほどであった。しかし、北側には同一平面にあって比較的鉄分の沈着することの少ないところがあった。はじめから住居址ではないか、との疑問を残して調査を進めた。B区の発掘も進み、何度も浸水氷結を重ねたが、最終的に清掃により4.6×6mの範囲にわたり周囲の赤い色にかこまれた、黒い土の部分が浮き出てきた。黒色土の方形の部分は周囲より堅く締まり、住居址の床面を思わせるに充分であった。北側と西側の一部は、攪乱を受けて乱れたものである。壁の状態は明確にとらえられなかった。遺物の出土状態からして弥生前期の住居址と考えられる。

G区8号溝の附近に焼土が発見された。焼土は一かたまりになって約1mの範囲にひろがっていた。焼土の性格については明らかになし得なかつたが、その発見は第3層が生活面であることを如実に示すものであろう。また、焼土周辺には夜臼式土器が散乱しており、そのことは、焼土の時期の古さを示すものとみられる。

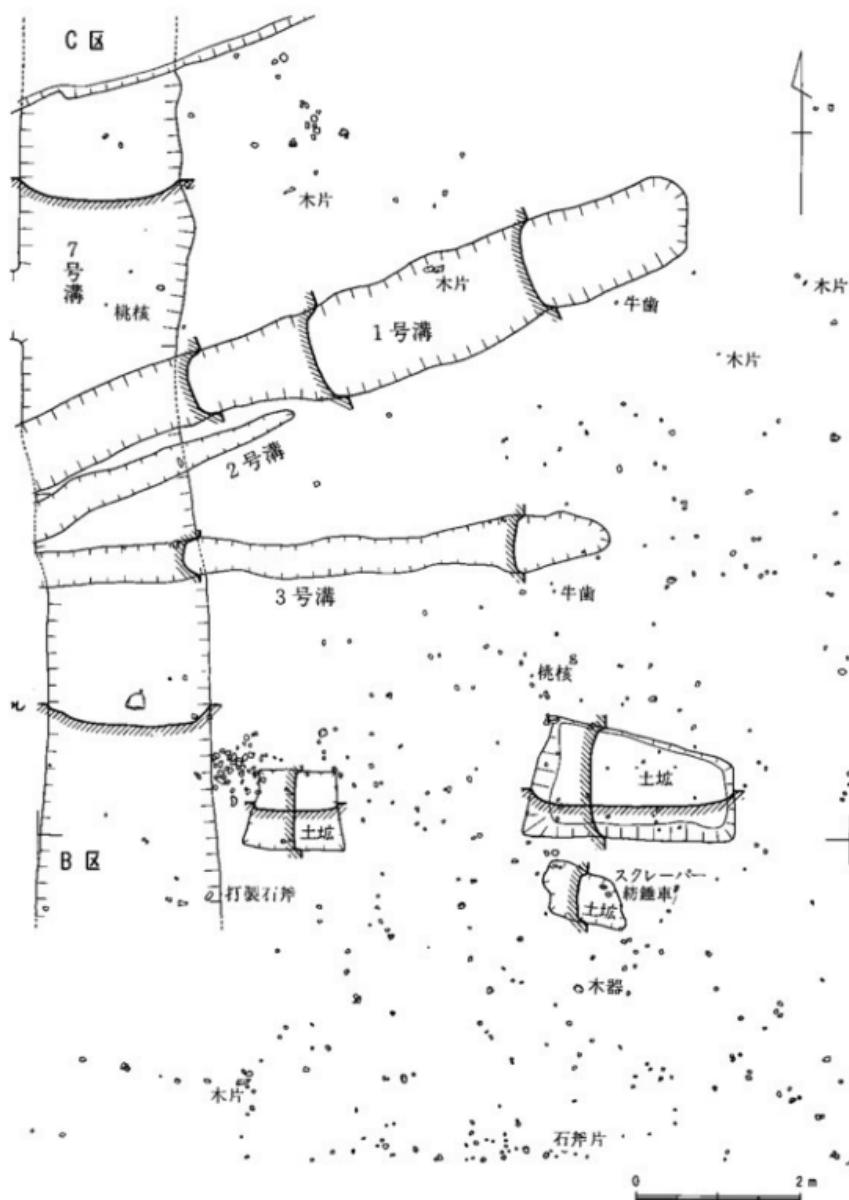
D区東寄り4号溝の南には数本の杭が発見された。杭は立って2層上から4層に打込まれていた。木杭の横には須恵器（甕）破片があり、古墳時代—奈良時代頃のものと考えられる。この杭は水田農耕に伴った杭列である可能性が強いが、調査区域を限定したため、それを追及することができなかつた。また、D区4号溝と7号溝にかこまれたあたりに、1つの造構とみられるものがあつたが、調査期間が乏しく精査出来なかつた。

土塙はB区とC区の境界あたりに3個あり、それを発掘した。いずれも浅く不正形で、夜臼遺跡や板付遺跡にみる袋状ピットの上面を削平された状態とみることも出来る。（緒方）
（註）

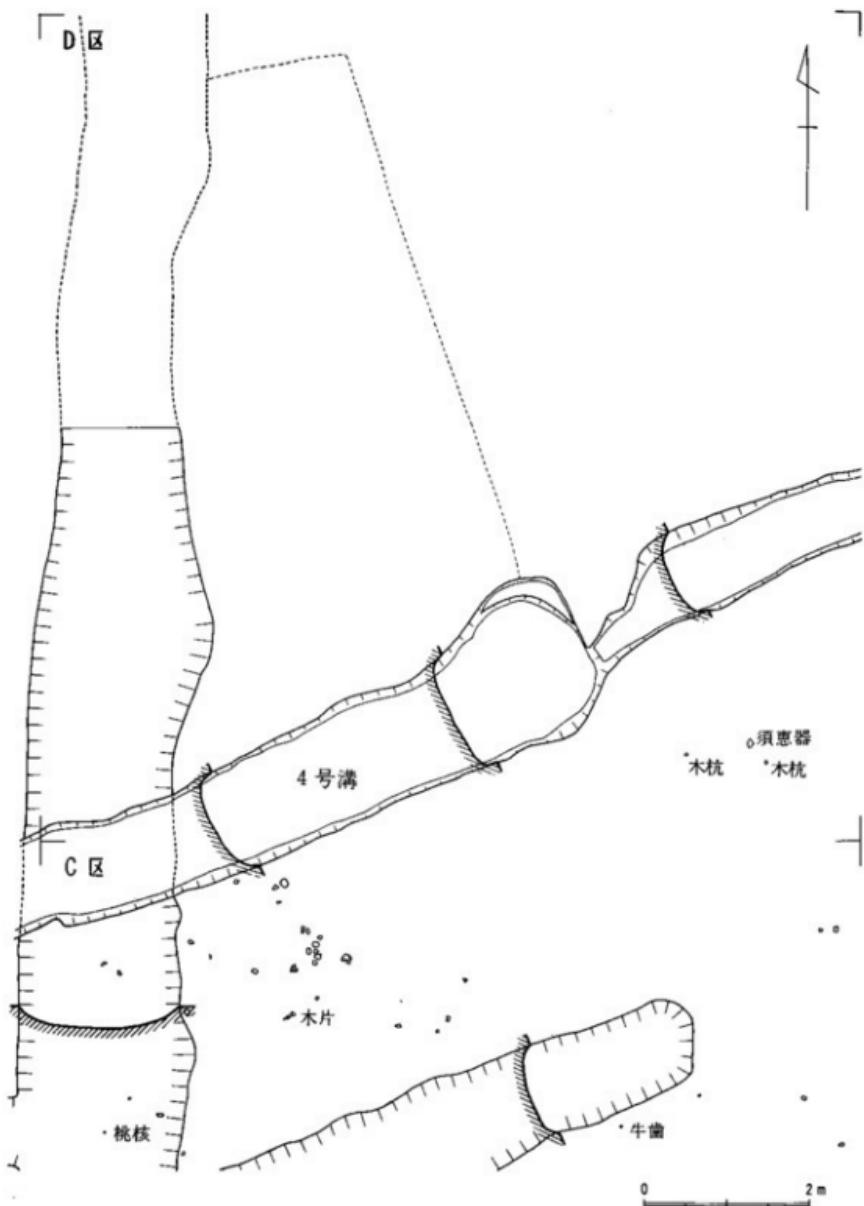
注 日本書紀文化の生成—本文編「福岡県板付遺跡」（森、岡崎）「福岡県夜臼遺跡」（森） 昭和36年



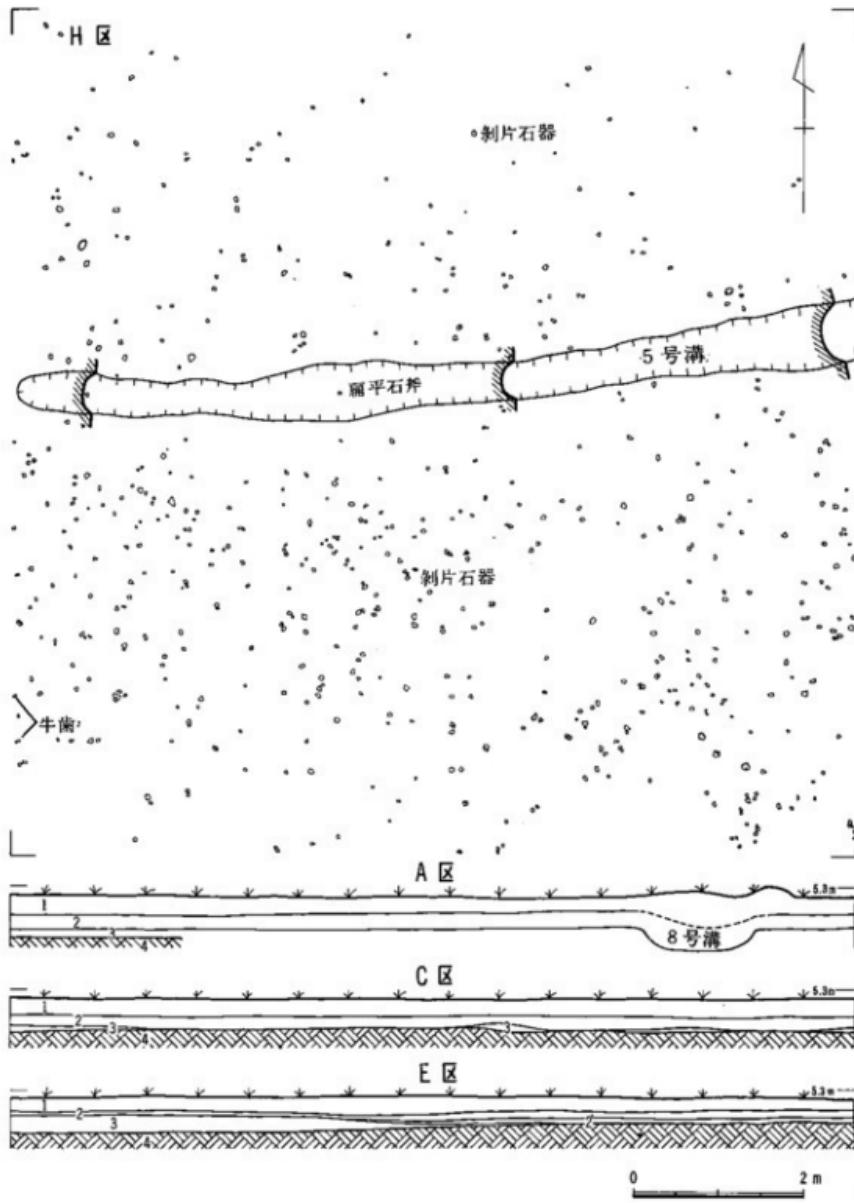
第8図 調査各区遺構（遺物出土状態）2



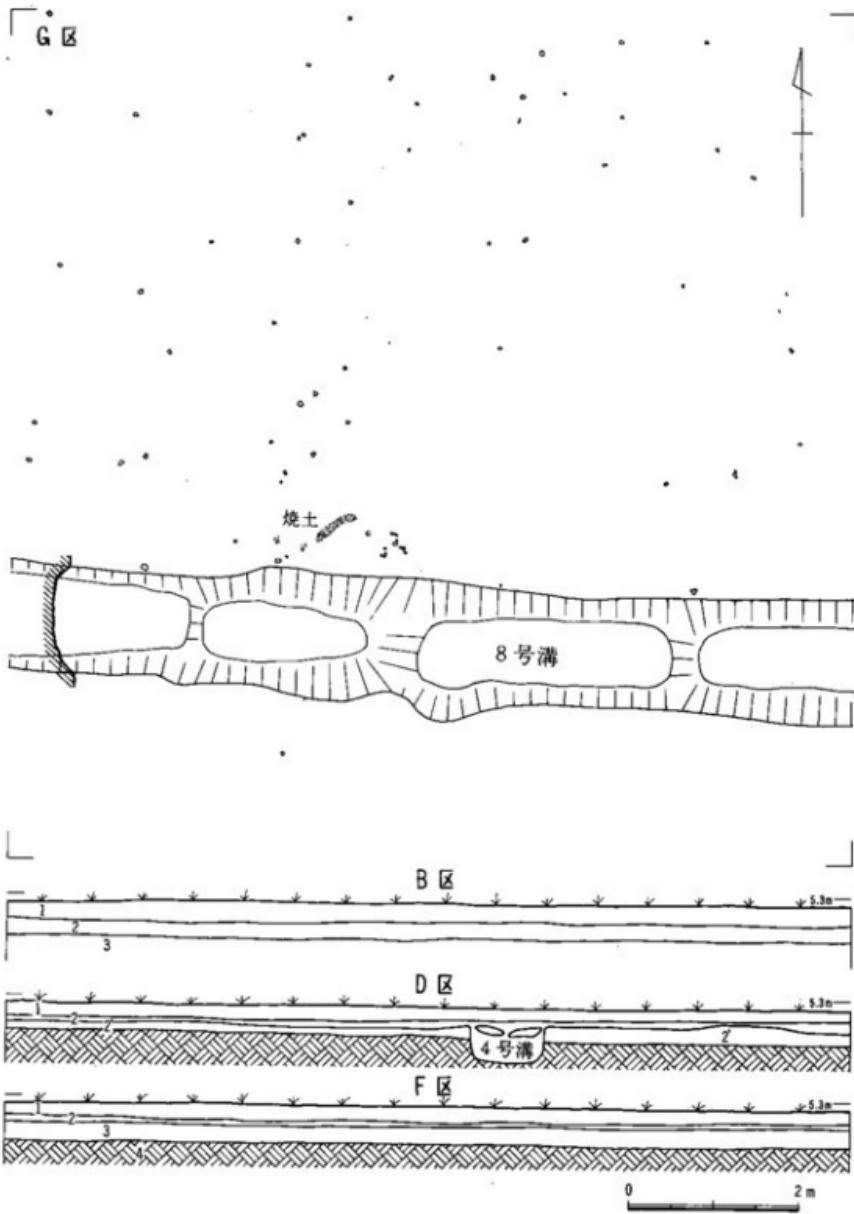
第9図 調査各区造構（遺物出土状態）3



第10図 調査各区遺構（遺物出土状態）4



第II図 調査各区遺構（遺物出土状態）5



第12図 調査各区遺構出土状態) 6

3、遺物

遺物は第2層及び第3層から発見され、殊に第3層は第8~11図にみる如く遺物の濃密な分布を示していた。第3層の遺物は二次的堆積物でなく、遺物の出土の状況からしてプライマリーモードのものと考えられる。土器のうち第2層などから第3層と同種の土器が発見されたのは、第3層の遺物の混入とみられる。第3層に夔形土器の破片の占める割合が多いのは、この地城が生活址である可能性を印象づける。また第3層には、弥生中期以降の遺物の混入がなく、出土土器を様式的にみて、縄文終末期~弥生前期末に及ぶものとみられるが、出土状態からそれを分離することは困難であった。

土器 (13~15図、図版4)

黒色磨研土器 (第13図) 器面はよく磨研され、黒褐色ないし黝黑色を呈する。縄文晩期の伝統的手法を強くのこしており、かって夜臼式土器Aといわれたものに属する。

第13図12~17は壺形土器である。12は肩部に僅かに段がみられ、口縁部は強く外反する。図示による復元口縁径約10cmの比較的小形の壺である。13は丹塗磨研土器である。外面及び内側上部に丹彩され、口縁部はわずかに外反する。丹塗り土器の破片は、この他にも少量発見されているが器形の知れるものは少ない。14の壺形土器は以上の二者と様相を異にしている。口縁部は直上し、むしろすばまり気味である。破片よりの復元部口縁径約7cmの小形壺で、器面は荒れ気味である。16、17は壺形土器の底部である。16にはよくその特徴があらわれている。

8、9も一種の壺形土器とみられる。完形品に恵まれないためその全容がわからないが、破片の状況からして胴部の最大幅にツバ状のものがつく。11は波状口縁の浅鉢とみられ、口縁部・外側に刻み目を付している。18は一般的に黒川式土器にみられる形態の浅鉢である。11と共に古い形を止めている。19、20は一種の夔形土器である。斎藤山遺跡からもこれに類似の土器片が発見されており、夜臼式土器Dとされるものである。

本遺跡から以上あげた黒色磨研土器のほか第14、15図にあげる土器がある。その中で、第3層から出土するものとして第14図及び第15図1~17に図示した土器がある。それについて、器形別に分け説明を加えれば次のとおりである。

夔形土器 (第14図1~22、第15図11~17) いずれも完形品にめぐまれないため、口縁部と底部との相関関係がわからない。口縁部は何れも凸帯をもち、刻み目を付しているのが特徴である。凸帯の肥厚の状態、器面調整の手法の相違から大きく二種類に分類することが出来る。

その一つは第14図(1~22)にあげた各土器片である。この中には下部の凸帯部あたりから大きく屈曲した3、5、7、9の如く、むしろ鉢形土器と呼ぶにふさわしいものがある。上部の凸帯の位置が口縁部よりいく分下につくもの、口縁端末が肥厚しそれに刻み目を付するものがある。前者は様式的に古いものとされている。器面が比較的平滑で条痕を消したものもあるが、

2、4、5、7、9～12の如く粗い横の条痕文があるものがある。条痕文は繩文土器の伝統的手法の一つで、その残存的手法とみられる。17～22は夔形土器の底部である。このうち17～19は底部端末が張り出し、いわゆる「円盤張り付け」土器で横に擦過痕があり、形態から夜臼式土器の底部とならない。これに比し20～22は、板付式土器の底部とみられるものである。21には、刷毛目調整文がみえ、22は指頭による調整痕が観取出来る。

これらの夔形土器は、従来様式分類の上、夜臼式一板付I式に属するものとみられる。しかし、それを事实上分類することは困難で、本遺跡での遺物の在り方には注目されよう。ついでながら付言すれば、福岡市板付遺跡などにみられる「如意形口縁」の夔形土器が発見出来ない(註2)のは、検討に値しよう。

本遺跡出土の夔形土器には、以上あげたもののほかに、第15図11～17の夔形土器がある。口縁部は肥厚し逆L字状に近くなる。器形も大形化し、11にいたっては、復元図による口縁部径30cmに達する。凸帯の状態もバラエティに富んでおり多彩になる。器面には繊細な刷毛目調整文が縦方向にかけられる。17の底部はこれらの口縁と相関関係があるものとみられ、前に述べた第14図（17～22）の底部と大きな違いがある。これらの土器は、様式的には「亀ノ甲タイプ」(註3)に近い。この他に第3層出土の夔形土器として、A、G区から各一片の黒髮式土器とみられる土器片があった。量的に少なく、また場所的に限定されるためその事実を述べるに止める。

壺形土器（第15図1～4、6、7、第14図23、24）黒色磨研土器に比して大形の壺がみられる。第15図2は比較的器形のわかるもので、口縁部が大きく外反し、なだらかな曲線を描きながら肩部に至る。横に三条の沈線がめぐり、肩部には僅かに段がある。器面は磨研され、塗彩された如くで褐色をしている。復元図による口縁部径18.5cmである。第15図4は、肩部に凸帯をもった小形の壺である。第15図6、7は壺形土器の肩部の文様で、下に三条の平行沈線文、上方に弧心を上にした重弧文が描かれている。これは一般に弥生前期板付II式に伴うものとみられている。第14図23、24として図示したのは、壺形土器の底部である。これらの壺形土器は板付II式として年代的に位置づけられるものとみられる。

鉢形土器、高环形土器（第15図8～10）8は鉢形土器で復元図による口縁部径16.5cmで、漸次すばまりぎみのカーブを描きながら底部に至るものとみられる。9、10は高环形土器である。脚部との接合部に貼り付けの凸帯一条がある。10の脚部は短かく、指頭により器面が調整されている。これらの鉢及び高环形土器は器形や、成形、焼成の上から前記の板付II式壺形土器に伴うものとみられる。

第2層及び溝中の土器（第15図18～24）第2層及び溝から出土する土器には、第3層と同じく夜臼一板付式とみられる土器もあるが、様式的に新しいものとして須恵器、土師器及び布目瓦がある。むしろ、この新しい遺物の方が第2層の形成された年代に近いものとみられる。18～

21は須恵器の环である。第2層でも下の方から発見されている。18、21は須恵器でも古式に属するものである。23、24は土師器で何れも4号溝中より発見された。變形土器(23)は器面を繊細な刷毛目で調整され、内面は斜めに胎土が削り上げられている。胴径は口縁部径より、はるかに大きく、丸底をなすものとみられる。24は瓶の口縁部の一部とみられる。おそらく両側に把手を付し、底に1~数個の孔を設けるものとみられる。以上、これらの土師器は様式的に新しく、古墳時代後期以降の土師器とみられる。22は布目瓦である。小破片であるが、重要とみられるので図示した。瓦は7号溝中より発見され、内側に布目压痕、外側にはより糸状の叩き目がみられる。これは、おそらく比較的近くにある奈良時代の肥後國分寺瓦と同類とみられる。瓦がどのようにして溝中に入ったか、過程の説明は重要であるが解明困難である。

土器形式を考え、土器論を展開するためには、第3層の土器は重要と考えられる。先ず、その在り方に注意を向けよう。調査は当然のことながら「存在の認識」を第一義とする。前述の如く、異った形式とみられる土器が同一層内に分布する、それは重要な事実の発見である。2片の黒斐式土器はさておき、夜臼式土器~板付式土器、それは混入とは考えにくい状況である。弥生前期末亀ノ甲タイプとみられる土器(第15図11~17)もある。この事実をどう理解し解釈するか、試みに他の遺跡での遺物の在り方に注目しよう。

熊本県玉名齋藤山遺跡を調査した乙益重隆氏の報告によれば「……板付式土器と夜臼式土器(鉢形土器)は明らかに共存……」することが指摘され、またこれに似た例として熊本県益城町八反田遺跡においては、上腰に夜臼式鉢を、下腰に板付式壺を合口腰棺として使用していた。^(註4) 古田正隆氏の「山の寺桶木遺跡」報告によると、その中に、火山灰地のゆるい傾斜地のため黒川式から山の寺式にわたる文化層の分離出来なかったとしている。福岡市板付遺跡においてもその点あいまいで、単純包含層として見出されていないことである。^(註5)

このような各遺跡での遺物の在り方をみると、二つの解釈が成り立つ。本遺跡での夜臼一板付II式の様式差が年代幅をあらわしている。即ち、同一地表(第3層)を様式ごとの年代幅を生活の場として使用され、その遺物が散乱したとみる見方。また一方各土器の様式差を、同一文化期におけるそのバラエティとして捉える場合である。ここにはおのづから異なった年代觀が成立し、本遺跡での様式的に古い夜臼式土器は、文化の残存形態であり、板付II式は次の文化期への移行形態ということになろう。

本遺跡において、夜臼式土器と板付式土器の分離は困難で、變形土器にも北九州における如き「如意形口縁」のものがみられない、その点齋藤山遺跡でも同様である。「齊一性」の名のもとに弥生前期を捉えるとしたら不都合な面も生じてくる。重要な問題を含んでいるだけに、これらの点については、更に検討を重ねる必要がある。

(緒方)

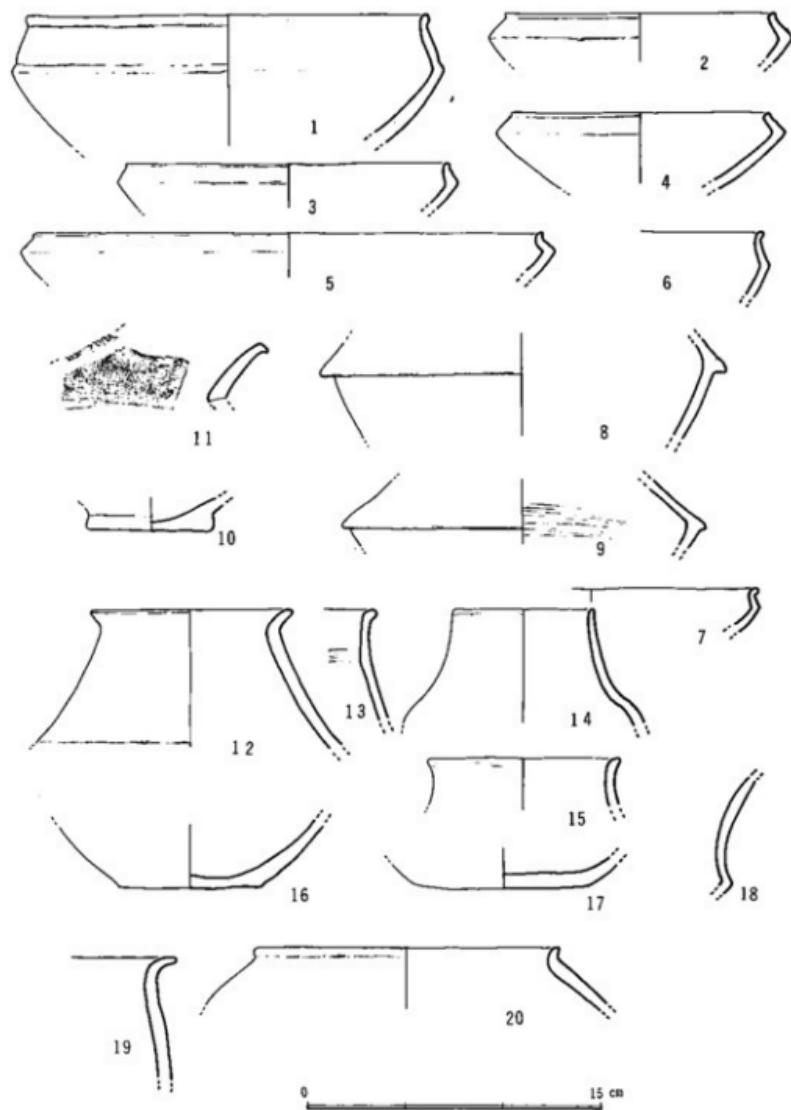
注1・4 乙益重隆「熊本県齋藤山遺跡」日本農耕文化の生成昭和36年刊

注2・7 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」日本農耕文化の生成 昭和36年刊

注3 小田富士雄「亀ノ甲遺跡」福岡県八女市宝岡の弥生遺跡調査概報 八女市教育委員会1963年

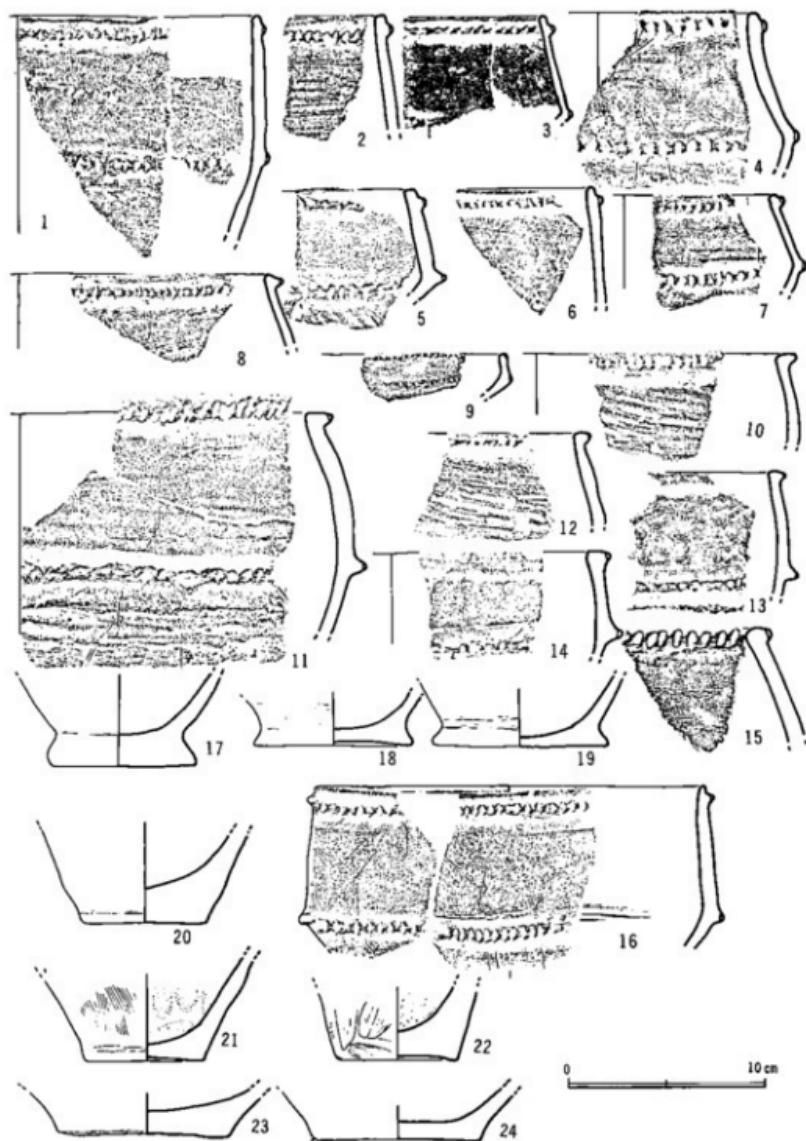
注5 筆者ら調査

注6 吉田正隆「山の寺桶木遺跡」 1973年刊



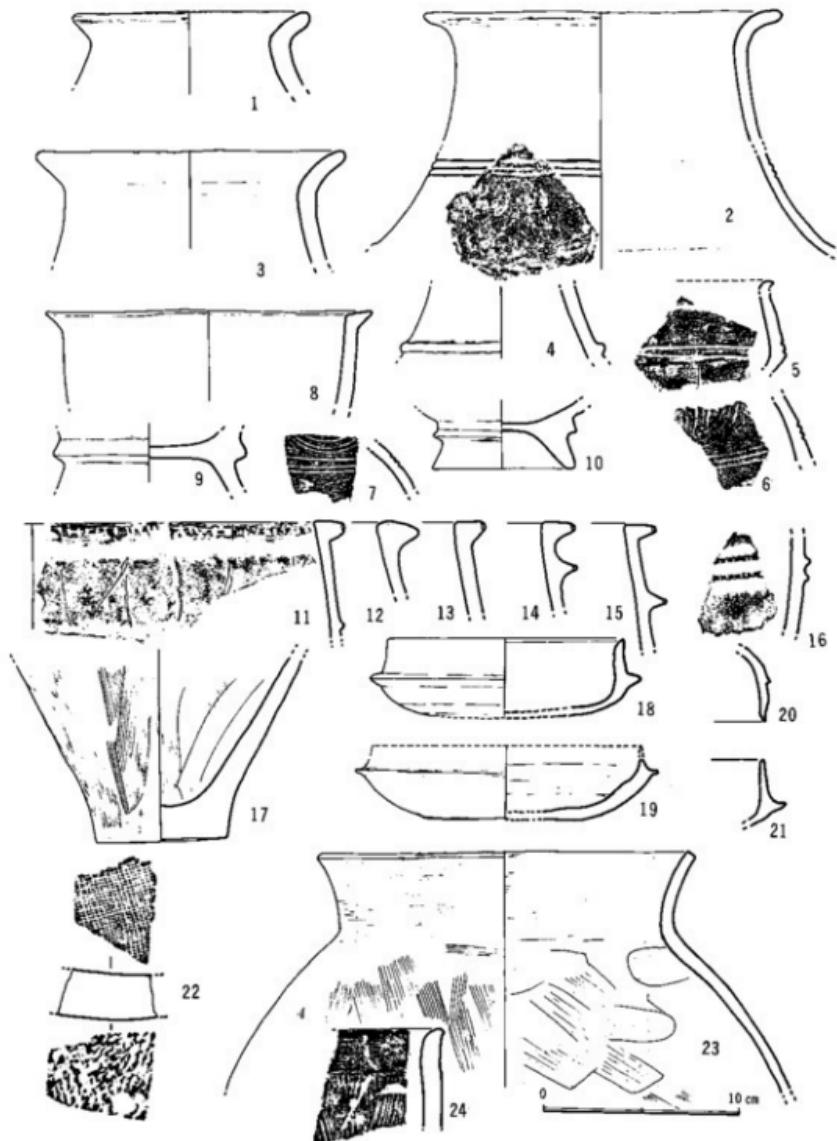
第13図 遺物（土器 1）

1~4、6、7) B区3層
 10、15、16、19) G区2層
 5~8) H区3層
 11、12) H区2層
 13) テストピット



第14図 遺物（土器 2）

1、2、4、6~9 B区3層 3、10 G区3層 5、12~14、17、18、20 H区3層
16、19、21、24 C区3層 11、15 F区3層 22 A区3層



第15図 遺物（土器 3）

14、7 A区3層	1、12、17 C区3層	2、3、4 H区3層	11、22 7号溝
9、11 B区3層	5、20、21 C区2層	15、19 H区2層	
18 B区2層	6、8、13 E区3層	23、24 4号溝	

土製品（第16図、図版3） B区第3層より紡錘車が出土した。2個発見され、何れも土製品である。その出土状態からして夜臼一板付式土器と共に伴したものとみられる。

第16図1は文様をもった紡錘車として特異なものである。中央部が乳房状に突出しており、福岡市板付遺跡発見の紡錘車の中で「つまみ形紡錘車」とせるものに相当する。つまみのある側に二重の刺突点圓文を三重にめぐらしている。刺突文は繊細で、径1mm余りである。反対の側の器面は粗く、凹凸がある。中央部に約4mmの孔を開けている。直径6.4cm、厚み2.8cm、重量74.8gである。一般的にみられる紡錘車に比して大きい。

第16図2はむしろ通常の紡錘車である。形態的にむしろ車輪状との表現があてはまる。つくりは平滑で、直径4.4cm、厚み1.5cm、重量36.5gをはかる。中央部に約5mmの穿孔がある。

以上の紡錘車のほかに、土製品にはあたらぬか粘土塊が一点発見されている。3.5×3.5cm、厚み1.5cm位の不定形のもので、指頭圧痕が付いている。焼けており、土器つくりの粘土くずを思わせるものである。

（緒方）

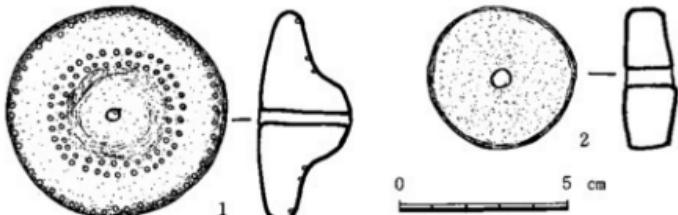
注 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」日本農耕文化の生成 昭和36年刊

石 器（第17図1～8、図版3） 石器には第17図にあげたもののほかに打製石斧、打製石鎌、スクレーパーがあり、黒曜石のチップも各区から多量に発見されている。

石包丁（1、8）いずれもA区第3層から発見された。1は比較的完好ではその全容が推定出来る。形状が三角形をなし、刃部中央で約135度にまがる。中心部近くに二孔を有し、背部は直線的である。刃は両刃で、西谷正氏指摘するところのいわゆる三角形石包丁とは異なる。
（註）背部と穿孔部には使用痕が顕著でヒモザレによる滑沢がある。現存長8.6cm、高さ6.9cmである。石質は砂岩質頁岩である。2の石包丁破片も1とほぼ同形のものとみられ、刃部には両刃を付している。石質も1と同系の石で、現存長6.0cmである。

太形蛤刀石斧（2、3）2はB区第3層より3はD区より発見されている。いずれも刃部のふくらみは大きくよく研磨されている。3の刃幅5.2cm両側に叩打痕をのこしている。2は硬質砂岩、3は蛇紋岩である。これらは夜臼一板付式と共に伴するものとみられる。

扁平片刃石斧（4、5）4は5号溝中より5はB区第3層より発見されたものである。いず



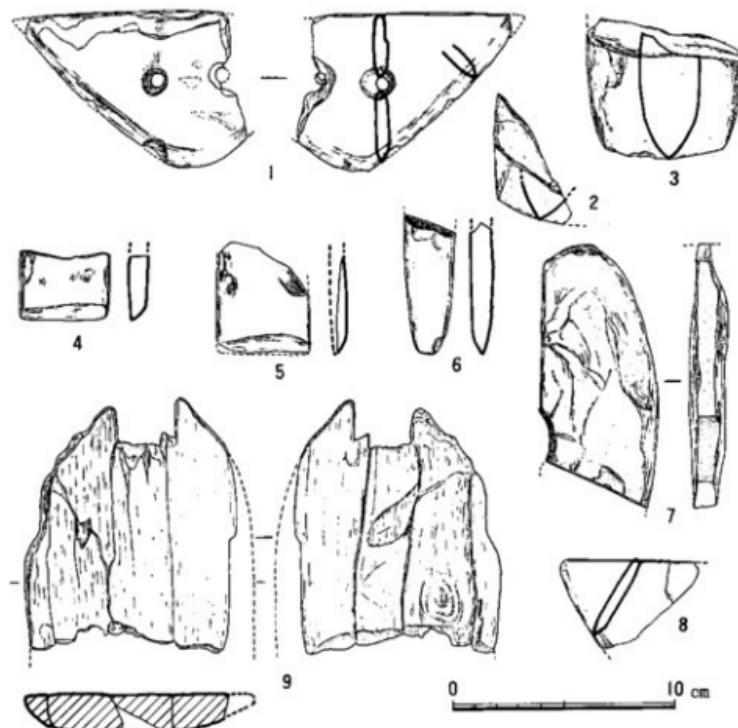
第16図 遺物（紡錘車）

れも刀幅が広く鉤状を呈している。石質は凝灰岩質頁岩である。これらの石器は夜臼一板付式土器に伴うものとみられる。

石のみ状石器（6）7号溝中より発見されたものであるが、本来、第3層中の遺物とみられる。細く長く、刃部はまるく石のみ状を呈する。硬質砂岩である。

抉り入石斧（7）B区第3層より発見された。方柱状片刃の石斧とみられるが、抉り入のあるあたりから折損している。現存長約11.8cm。凝灰岩質頁岩。

この他、本遺跡から打製石錐（図版3）16本が発見されている。表採資料2点のほか、A、B、H区の第3層から発見されている。いずれも無柄式のもので石質は黒曜石とサヌカイトである。またサヌカイト製のスクレーパー（図版3-6）はB区第3層から紡錘車（第16図1）に接する如くして発見されている。交互刻離された刃部は鋭く、石器製作の上伝統的古い手法が用いられている。



第17図 遺物（石器及び木器）

- | | | |
|---------|------------|--------|
| 1、8 石包丁 | 4、5 扁平片刃石斧 | 7 抜入石斧 |
| 2、3 石斧 | 6 石のみ状石器 | 9 木器 |

る。最大長 8.2 cm。

(緒方)

以上あげた石器は、出土状態からして、夜臼一板付式に伴うものとみられる。

注 西谷正「三角形石包丁について」—考古学論叢別府大学考古学研究会 1973。

木製品その他 本遺跡から木器のほか獸齒及び多種の植物性遺物が出土している。木器（第16図9）は第6図にみる如く、B区第2層下面より発見された。現存長11.5cm、現存幅9.2cm、厚み1.8cmである。表面平滑に削られ、周辺にも加工がみられる。全体から受ける印象として下歯を思わせるが、木器の性格については類例の增加をみて更に検討する必要がある。

獸齒（図版5）について、H区及びC区の第2層下面より発見されている。東京農工大学教授林田重幸氏の同定により、それが牛の臼歯であることが判明した。同教授の牛歯についての計測値と所見は次のとおりである。

	苗代津C区第2層下面 長さ/幅mm	トカラ群島 口之島在来4才半
上顎左第1後臼歯(LM1)	30.0/19.2	29.2/20.0
〃右第1後臼歯(RM1)	(27.5)/19.6	29.2/20.0

本遺跡C区第2層発見の上顎左右第一部位の歯のうちRM1の長さ(27.5mm)と小なるのは、不完全なので現長を測ったことによる。実物を比較すると大体同じで、30.0mm位とみられる。5才半位のものである。

	苗代津H区第2層下面 長さ/幅mm	トカラ群島口之島在来牛4才半
上顎右第1後臼歯(RM1)	28.0/15.4	29.2/20.0
上顎左第3後臼歯(LM3)	30.2/16.4	32.7/17.7

H区発見のものはC区発見ものより若く、4~5才位の牛の臼歯とみられる。C区発見のものがH区発見のものより大きいが、トカラ群島口之島在来牛と大同小異である。

植物性遺物についてC区、G区の2層および各溝より出土している。種の同定について大阪府立大農学部松本豪先生にお願いした。その結果、次のことが判明した。

出土場所および層位	植 物 遺 体
C区、G区 2層	野 桃
1号溝	ジュズダマ、ムク、ノブドウ
2号溝	植物遺体は不明
4号溝	ジュズダマ、ムク、ノバラ、ノブドウ、マクワウリ、タデ
5号溝	ゴキヅル、エゴノキ、蒴果は不明

これら植物性遺体の詳細な調査結果については、巻尾に付2「熊本市健軍町苗代津遺跡出土植物遺体の調査について」として上載した。

(緒方)

四 総 括

苗代津遺跡の各区の調査結果を要約し、それに検討を加えて問題点を指摘したい。

溝は総数 8 条発見された。これらの溝には多少の時間的差異はあるが、その活用の時期は、層位的に第 2 層と関連深く古墳—奈良期と考えられる。但し 8 号溝は現代まで利用されており、溝掘開の時期については明確でない。これらの各溝の機能的な面についてこれまで触れなかつたが、遺跡の立地、占地の状況からして水田農耕の灌排水に利用されたものとみられる。溝中及び第 2 層下面から発見された植物性遺体等については検討をする。これらが如何なる条件下に混入遺存したか、即ち牛歯、桃核、まくわ瓜等の搬入経路については当時の自然的・社会的生活環境を知る上にも重要である。これは一面半知の知識をもっては解明しがたいが、今後に一つの材料を提供したことになる。

更に A～F 区東側、即ち江津湖水流に対して直角方向に求めた土層断面（第 11、12 図）は重要なと思われる。そこで若干の検討を加えておこう。この地域は現在水田として利用されており、全体がよく均平されている。それは農民のたゆまざる労働のたまものであるが、まづ土層断面を観察検討しよう。第 1 層（鉢床）、第 2 層はこの地域で普遍的にみられる土層である。しかし第 3 層は部分的に欠落しており、殊に C 区においては甚だしく、第 2 層より直ちに第 4 層に移行している。これは第 3 層以下のグライ土壤形成と関係深いものと考えられるが、一つに第 2 層形成時に削平されたと考えることができる。その削平の動因をなすものは水田農耕であろう。このように考える時この調査は、この地域での条里制、古代の水田開発を考究する上の基礎的資料を提供することになろう。

本遺跡における第 3 層は夜臼・板付期の生活面と考えられる。住居址、焼土の存在は一つの証拠である。この灌排水容易な自然的環境は、初期水田農耕の立地にふさわしく、古代人もこの地を選んで水田農耕をいとなんなく相違ない。湧水に水源を求める水田農耕は、水温の低いこともあって生産性の低いものであったものとみられる。

調査期間に制約され、また湧水に構いされ、これが弥生前期の水田であると特定することが出来なかった。しかし発見された土器底部の輥圧痕は初期稻作の証拠となろう。託麻原の一角に占地する「上ノ原遺跡」、そこで発見された縄文晚期とみられる二粒の炭化米。夜臼・板付期にいたり水田農耕の適地を求めて水辺に拠点を移す。やがて集落が出来る。村落共同体は漸次規模を拡大し、生産を高め、より高次の農耕社会へと展開するものとみられる。

次に出土遺物についてまとめてみよう。夜臼式土器には壺と甕の両方がみられる。甕形土器の特徴として、凸帯が細く、刻み目の小さいものが多く繊細な感じである。また器面に条痕文の残るもののが少ない。

弥生式土器には壺形のものが若干ある。とくに籠彫沈線文の土器があり、これに板付 I 式は

なく、いずれも板付II式に相当するものである。高坏も数点あるが、その形態から板付II式に相当しよう。夔形土器には前期特有の破片がなく、如意形口縁の破片は一片も発見されなかつた。夔形土器の中には亀ノ甲タイプとみられるものが発見されている。

これらの様式の異なる土器が同一層（第3層）から発見される。これの解釈については前にも述べた如く、それを共伴するとみる見方と、時代の累積とみる二様の見方が成り立とう。その解釈の妥当性については、他の各遺跡での出土状況、調査資料について今後更に検討する必要がある。このことは、肥後に於ける縄文より弥生への遷移過程を究明する上、重要な課題である。

本遺跡の出土遺物である土器、石器は生活器材の一つとみられる。熊本における同時期の遺跡として白石、塔ノ本、八反田、水ノ山の各遺跡がある。これらの各遺跡はいずれも窯場墓であり、生活文化の一般性を引き出すには無理があろう。しかるに本遺跡は生活址であり、生活文化の一般性を知るには好都合である。玉名郡斎藤山遺跡での遺物の組合せが北九州などと異なり、特殊な地域性と考えられていた。しかるに本遺跡の調査により、熊本ではより一般的な傾向であることが確かめ得たのも一つの収穫である。

最後に本県内における弥生前期の遺跡名を挙げれば、次のとおりである。

熊本市御幸木部町八万塚	玉名市 中道具塚
〃 田迎町二石	玉名郡天水町斎藤山
〃 清水町榆ノ木	菊池郡大津町矢護川・水ノ山
〃 画津町中ノ島	〃 〃 〃 牟田原
〃 健軍町広木	菊池市水源地区伊野開拓地
〃 画津町上江津	鹿本郡植木町轟・塔ノ本
上益城郡甲佐町麻生原	〃 〃 白石
〃 〃 八ツ割	〃 〃 河原立
山鹿市蒲生字下原	八代市西片町
〃 十三部堀ノ内	球磨郡相良村松葉 などがある。（緒方）

参考文献 猪 昭志「熊本県水ノ山遺跡における配石墓群の一例」考古学雑誌50-1

乙益重隆「熊本県斎藤山」 日本農耕文化生成

森 貞次郎・岡崎 敬「福岡県板付遺跡」 日本農耕文化生成

川瀬金次郎他「日本の水田土壤」

弥生前期遺跡地名については、森 貞次郎、猪 昭志、富田絶一の各氏の協力によった。

追 補

本報告書校正時に、4号溝中出土の木片についてC¹⁴年代測定の結果がでた。それによると

N-1821 EZUKO-1 1430±80Y(1390±75Y) B.P. 日本アイソトープ協会

年代は C¹⁴の半減期5730年（カッコ内は5568年）にもとづいて計算されたものである。そうすれば、4号溝中の木片は6世紀（古墳期）となり、発掘による所見とも矛盾しない。（緒方）

付1 江津塘について

緒 方 勉

苗代津遺跡の調査結果に基づいて一つの試論を呈示したい。

二ヶ月有半の現地調査を通じて筆者の脳裏を去來した疑問がある。疑問そのものは素朴なもので、この低湿湧水地に弥生前期の人々が生活をなし、住居を構えたかということである。現地地表面の標高5.2m、冬場の調査時における江津湖水面との比高差約1mで、第3層上面となるとこの比高差は更に縮まり60cm、水はけの悪いものになる。調査も連日排水作業を必要とした程で、地下より浸透水、湧水で福いされ忽ち作業困難となる。この様なところに古代人といえども生活の拠点をおいたとは考えにくいのである。現地は雨季には冠水し、例年水びたしになる。だからといって調査の事実、遺跡の存在を否定するわけにはいかない。そこで、考えられるのが江津塘、即ち江津川右岸の築堤である。

我々は、ややともすれば地形の現況からして古代を復元したがる。それは誤りで、まず出来る限りの環境復元を想定してみる必要がある。堤防は人為的構築物であり、政治的構造物でもある。いつの時代かに築かれ、修復を重ねて現状に至っているのである。試みに第1図により江津湖の位置を確かめよう。築堤が右岸にのみある変った川で、流路も赤井川の合流地点に至り大きく転換する。堤防が地形の傾きに対して直角方向に築かれ、むしろ水流をさえぎる役目をしている。（従って左岸には堤防がない）これによって右岸一帯は浸水から守られることにもなる。これに対して左岸は江津湖の水位上昇、湛水面積拡大にともなって水没地域が出てき、総体的に排水が悪くなるのは当然のことである。おそらく湿地帯における微高地とみられる江津湖中ノ島及び太郎ヶ島の各遺跡も水中に孤立し、水没するところも出てこよう。古代人にとてまさに「滄桑の変」である。苗代津遺跡の対岸上無田部落附近の標高点を求むれば、4.2m、4.1mと低くなっているのはこれを裏付ける証拠である。水流は筋筋にもなって流れたものとみられる。

江津川右岸の築堤は、この一帯の地理的・社会的变化をもたらす動因となる。『肥後国誌』に「……此川（江津川）筋西ノ塘ヲ大名塘ト云清正侯塘ヲ築セラル……」とある。このように加藤清正により築かれたと考えられている。私は築堤が江津川右岸一帯村落形成の密接不離な関係にあるものと考える。右岸地区はいわゆる無田で、沼地である。そのまゝでは安定した生活基盤とはなりにくいからである。長溝、所島、良町は棚倉氏（本稿第2—3）の指摘する如く自然堤防上の村落であり、村落の成立も古いものとみられる。そこでこの際江津塘右岸にそった村落に注目しよう。「江津」の地名は古く應永廿七年（1420）阿蘇家文書の中に「ゑづみやう」の名がみえる。また降って「檢地帳」にあらわれた村落名を抽出すれば、（圈点筆者）

慶長8、11、7 託摩郡之内 江津村

慶長 8、11、7	託摩郡之内 江津村無田
慶長 9、9	九州肥後國託摩郡江津村
慶長 8、11、11	託摩郡之内所島村牛田
慶長 8、11、11	託摩郡之内所島村
慶長 9、9	九州肥後國託摩郡所崎村
慶長 8、11、11	託摩郡之内重富村
慶長 8、11、11	託摩郡之内重富村牛田

などがある。花岡興輝氏によると慶長9年の検地帳はいわゆる太閤検地で、天正検地の写しであることが論証されている。そのようなことからこゝに出てくる村落は、加藤清正入国以前に既に存在していたものと考えられる。江津村は堤防ぞいの村落である。江津村牛田は特定しにくいが、上無田とすれば慶長8年には江津の出村として存在したことになる。慶長8年の検地帳によれば江津は「家数合37」で、そのうち「20」にのぼる「りょうし」が居たことになる。

この様に考えると江津塘の加藤清正築堤説も少々あやしくなってくる。おそらくそれ以前に一応の形があったのではないか、土木の天才清正公によってこれを更に大規模な修復をなされたのではなかろうか。

築堤そのものが政治力を背景にして出来た構造物であることは前に指摘した。築堤により水没する地域と、逆に水禍から守られる地域とに分れるからである。我々はこれと似たものとして下笠、松原ダムの紛争の記憶が新しい。一村落位の単位ではとても手におえないからで、おそらくこれを政治的に動機づけるものがあろう。江津湖（江津川）において、それは何であろうか。

奈良時代における肥後國府（託麻）の存在は重要である。昭和37年発掘調査が行なわれ、報告書がまとめられている。それによると、^(注3)

これ（水流のあと）は、國府の東一軒の地点に江津湖の湧水地帯をひかえ、その水が白川の洪水と合して、このあたりを流れた跡である。

との見解が示されている。託麻國府の存続期間がたとえ短期であったとしても、おそらく江津川上流の護岸に着手されたものと考えられる。

なお築堤の問題は必然的に条里制、新田開発、村落形成と関連することも多く、記録の発掘のほか、金石、民俗学、地理学上の知識を駆使し総合的に検討すべき事柄である。ここでは、江津湖苗代津遺跡調査資料をもとにして予察を試みた。

注1 「藤公遺業記」肥後文獻叢書第2巻所収、本田彰男著「肥後藩農業水利史」昭和45年刊

注2 大日本古文書家わけ第12阿蘇家文書之一「238鉢草社領名々田現作注文」

注3 花岡興輝「肥後の検地帳」熊本史学29号所収

注4 松本雅明「肥後の國府—託麻國府発掘調査報告一」古代文化第17巻第3号所収

付2 熊本市健軍町苗代津遺跡出土植物遺体の調査について

大阪府立大学農学部
遺伝育種学研究室 松本 豪

I

調査を依頼された植物遺体は、発掘場所ごとに管瓶に入れてあり、原形をとどめているものから、植物遺体であるとしか確認できないものまであった。調査は、他の植物と区別し得る遺伝的な特徴について、現存する植物と比較しながら行なった。したがって、該当する植物がない場合には不明とした。また、昆虫の残骸については、走査電子顕微鏡による調査方法があるけれども、昆虫の微細構造についての研究が進んでいない事と、電子顕微鏡の操作ができないので調査しなかった。完全な形の植物遺体について、測定にたえうるものは測定した。植物遺体相互の関係、植物遺体から考えられる遺跡の問題点などはふれていない。これらの事は、他の搬出物の調査をまって論すべきと思われる。

II

1. *Prunus persica* Batsch. var. *subspontanea* Makino (ノモモ)

遺跡から出土するモモの核果には、現在の栽培種に近似の卵形でやや大形のものと、小形の丸味の強い円形のものがあると云われている。前者はノモモ、後者はコダイモモと呼ばれている。C区2層およびG区2層から出土したものは、卵形で両端が尖ったあまり大きくない。核果の表面は現在のモモの核果の表面と同じ模様を呈し、ノモモに属するものと思われる。この核果は、現在の花桃の大きさ形によくており、果実も花桃の果実ぐらいではなかったかと思われる。測定値を表にした。

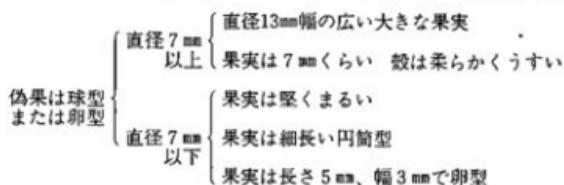
Prunus persica Batsch. var. *subspontanea* Makino

No.	長 mm	幅 mm	厚 mm	長/幅	幅/厚	長/厚	備考
1	26.4	19.5	15.4	1.35	1.26	1.71	
2	25.7	18.7	14.5	1.37	1.28	1.77	
3	23.8	18.4	13.8	1.29	1.33	1.72	
4	22.0	18.5	—				破損

2. *Coix lacryma-jobi* L. (ジュズダマ)

1号溝、4号溝から出土した球状の偽果は、果柄の取れた跡は丸い凹みになり、他方には円錐形をななめに切断したときにできる切断面のような孔があった。孔のなかには雄性花穂の残部がついているものもあった。さらに、偽果をくだくと、雄性花序の穂梗と退化小穂の残骸があり、現在あるジュズダマと比較すると近似であった。これらのことから、この偽果はジュズダマとした。

ジュズダマの偽果は直径7mmをさかいにして次のように分けることができる。



現在あるものでは偽果が7mm以上あると栽培種と云われ、栽培種の澱粉はほとんどが糯性である。出土した偽果の内部には澱粉はなかったので、糯性の確認はできなかった。偽果の大きさからはこの出土偽果が栽培種であるとはみとめがたい。出土偽果の測定値を表にした。

Coix lacryma-jobi L.

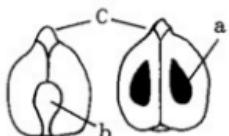
No	長 mm	幅 mm	厚 mm	長/幅	幅/厚	長/厚	備考
1	7.8	5.0	6.1	1.56	0.81	1.27	
2	7.1	5.1	6.3	1.39	0.80	1.12	
3	8.5	6.6	5.8	1.28	1.13	1.46	
4	6.5	4.7	7.7				幅の方向から押しつぶされている
5	5.9	5.4	3.5				押しつぶされている
6	6.5	5.8	6.5				変形破損
7	4.3	3.6	6.1				押しつぶされている
8	6.9	6.0	—				破損
9	—	—	—				破損
10	—	—	—				破損

3. *Aphananthe aspera* Planch. (ムク)

1号溝、4号溝の出土植物遺体の中に、長さが6.6mm、幅が6.5mm、厚さが5.4mmくらいの偏球形のものが計2個あった。片方に小さな種瘤がみられる。保存中のムクの種子と比較するとまったく同じであった。果実は食用になる。

Aphananthe aspera Planch.

No	長 mm	幅 mm	厚 mm	長/幅	幅/厚	長/厚
1	6.6	6.0	4.6	1.10	1.30	1.43
2	6.7	7.0	6.1	0.95	1.14	1.09
平均	6.65	6.50	5.35	1.03	1.22	1.26



4. *Ampelopsis heterophylla* Sieb. et Zucc. (ノブドウ)
ブドウ科の種子は図のようになっている。種子の腹面には図のaのような長楕円状皮針形の凹がある。背面にはbのようなへら形の模様がある。栽培種の種子は勝(図のc)が

突出て、長楕円状皮針形の凹は臍の方へ流れた形になる。栽培種の種子の大きさは約7mm以上ある。野生種（エビヅル、ヤマブドウ）などは7mm以下である。ギヨウジャノミズになると5mm以下の小形で、ノブドウは長径と幅径がほとんど同じくらいになり、臍がわずかに出た円形に近くなる。ノブドウと同じくらいの大きさで長楕円状皮針形の凹がなくなるとツタ属の種子になる。C区1号溝、4号溝から円形に近い臍のわずかに突出した種子が出土している。この種子は腹面に長楕円状皮針形の凹みがあり、背面には頂から臍の方へむかう小さなへら形の模様がある。ギヨウジャノミズの種子のようにみえたが、臍部の突出がすくないのでノブドウであろう。食用にしたかもしれない。

Ampelopsis heterophylla Sieb. et Zucc.

No.	長 mm	幅 mm	厚 mm	長／幅	幅／厚	長／厚
1	3.9	3.9	2.7	1.00	1.44	1.44
2	3.8	4.2	2.8	0.90	1.50	1.35
3	4.0	3.8	2.6	1.05	1.46	1.53
4	3.8	3.6	3.0	1.05	1.20	1.26
5	3.3	3.9	3.2	0.84	1.21	1.03
6	3.7	3.4	4.3	1.08	0.79	0.86
7	3.8	2.4	3.0	1.58	0.80	1.26
8	3.5	2.1	2.9	1.66	0.72	1.20
平均	3.7	3.4	3.1	1.15	1.14	1.24

5. Rosa sp. (ノバラ)

4号溝から小形で球形に近い長楕円形の偽果がでている。ホシブドウを小さくしたような感じがする。偽果をくだくと中から約2×1mmの大きさの種子が、約10ヶでてきた。一方に果柄の一部を残しているが、頂部には花柱は残っていない。偽果の表面にはトゲはない。ノバラの偽果は6~8mmの大きさで、種子の形は卵形または長楕円形、1偽果内の種子数は約10ヶである。出土した偽果の測定値などから小形で長楕円形の偽果を結ぶノバラではないかと思う。ノバラの新芽は食用になり、偽果は薬用に使われるが、利用のほどはわからない。

Rosa sp. をノバラとしたのは、野にあるバラと云う意味である。出土した偽果では、ヤブイバラ、ヤマイバラ、ノイバラなどの見分けがつかない。Rosa sp. に和名を付けたのは正しくないと思う。

Rosa sp.

No.	長 mm	幅 mm	長／幅	No.	長 mm	幅 mm	長／幅	
1	6.3	6.4	0.98	8	7.0	6.0	1.16	
2	6.4	5.2	1.23	9	6.5	6.1	1.06	
3	6.7	5.7	1.17	10	6.8	6.7	1.19	
4	6.2	5.3	1.16	11	5.5	5.7	—	長さの方向で破損
5	6.5	5.4	1.20					
6	6.4	6.7	0.95					その他破損偽果21ヶ
7	6.2	5.2	1.19					

6. *Cucumis Melo* L. (マクワウリ)

4号溝には誰がみても瓜類の種子とわかるものがある。測定値は表にした。瓜類の種子は、臍の両側にある種瘤の大きさと種子の長さによって或程度分けることができる。出土した種子はキュウリまたはマクワウリのものようである。キュウリの場合種子は細長い扁平であり、マクワウリの場合、卵抜針形を示す。出土種子の長さと幅の関係に注意してみると、長さの割に幅があるので、キュウリの種子とはみとめがたい。出土種子の測定値はシロウリにもっとも近いが、マクワウリとの見分けが難しく、シロウリもマクワウリも同属であるので、現在、一般的によく知られているマクワウリとしてあらわした。

Cucumis Melo L.

No.	長 mm	幅 mm	長/幅	No.	長 mm	幅 mm	長/幅
1	9.3	3.6	2.58	13	7.8	3.5	2.22
2	8.7	3.6	2.41	14	8.3	3.4	2.44
3	8.5	3.6	2.36	15	8.0	3.5	2.28
4	9.2	3.6	2.55	16	7.3	3.7	1.97
5	8.5	3.6	2.36	17	8.0	4.0	2.00
6	8.2	3.7	2.21	18	7.1	3.5	2.02
7	8.4	3.9	2.15	19	6.4	3.5	1.82
8	8.1	3.9	2.07	20	5.6	3.3	1.69
9	8.1	3.8	2.13	21	8.4	4.1	2.04
10	8.0	3.7	2.16	22	6.1	4.3	1.41
11	8.6	3.6	2.38	平均		3.67	2.16
12	7.9	3.4	2.32				

7. *Polygonum* sp. (タデ)

三稜形で卵形に近い種子が4粒あった。三稜形を示す種子はタデ科のものに多い。ソバの種子は5mm以上、ギシギシは背面に小形のこぶまたは、翼形のがく片につつまれている。タデの種子は鈍い三稜形で卵形または橢円形を示し、3mm以下である。出土した種子は、鈍い三稜形で約3×2×1mmの大きさで、種子の背面のこぶや翼状に生長したがく片もないのでタデの種子とした。タデのなかでもシロバナサクラタデ、ヤナギタデなどが近いが断定はできない。

Polygonum sp.

No.	長 mm	幅 mm	厚 mm	長/幅	幅/厚	長/幅
1	2.7	2.0	1.3	1.35	1.53	2.07
2	3.0	2.3	1.2	1.30	1.91	2.50
3	2.7	2.0	1.3	1.35	1.53	2.07
4	3.0	2.3	1.5	1.30	1.53	2.00
平均	2.85	2.15	1.33	1.33	1.63	2.16

8、*Actinostemma lobatum* Maxim. (ゴキズル)

瓜類の種子の特徴である種瘤が鱗の両側にあり、種子の表面には凸凹の模様のあるものが5号溝から出ている。瓜類のなかで種子の表面に凸凹の模様のある種子は、ゴキズルの他にツ

Actinostemma lobatum Maxim.

No.	長 mm	幅 mm	長／幅
1	9.9	7.6	1.30
2	8.9	5.8	1.53
3	8.3	6.3	1.31
4	8.0	6.1	1.31
平均	8.77	6.45	1.36

ルレイシがある。ツルレイシは長さが14mm、幅が7mmくらいであるので、出土した種子は大きさと表面模様からゴキズルであろう。

9、*Styrax japonica* Sieb. et Zucc. (エゴノキ)

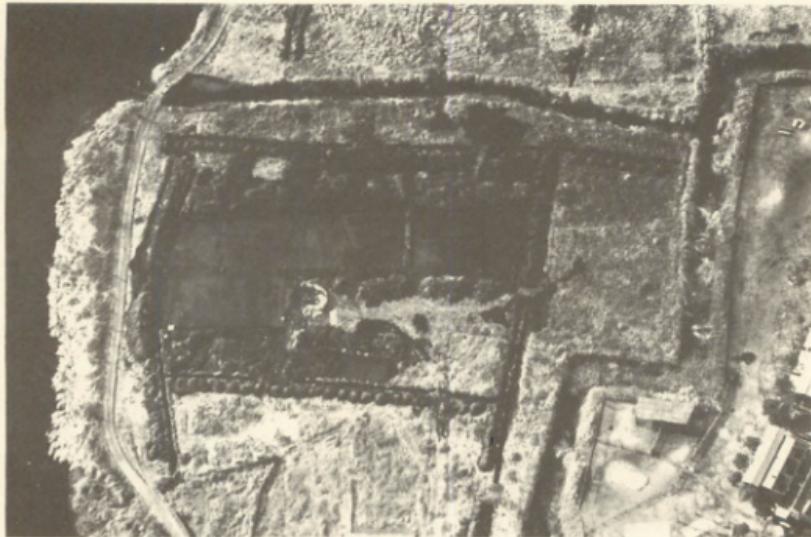
Styrax japonica Sieb. et Zucc.

No.	長 mm	幅 mm	厚 mm	長／幅	幅／厚	長／厚
1	10.9	6.8	6.8	1.60	1.00	1.60

5号溝から、浅い3本の縦溝のある卵形の種子があった。測定値は表の通りである。この種子はエゴノキのものである。生の果皮はすりつぶし川に流して魚を取るのにもちいられる。この種子はときどき出土が報告されている。種子の中には脂が多く山雀が好んで食べるくらいであるから、食用に供していたかもしれない。

10、その他

2号溝から出土したものは、胚芽の位置がわからないので何とも云えない。5号溝の蒴果はヒメシャラのように思われるが、ヒメシャラの実物をみていないのでわからない。



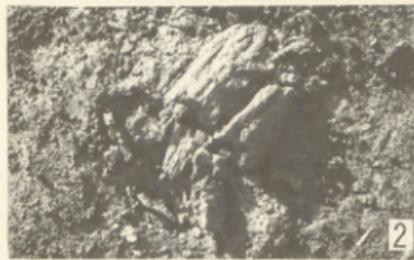
遺跡鳥かん
(東上空より)



1



3



2



4

土層及び 木器出土状態

- 1 遺跡風景東より
2 木器出土状況 (B区)
3 テストピット土層断面
4 1号溝西側断面



西より各遺構を見る



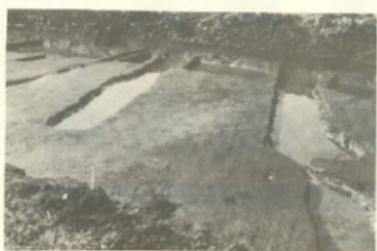
東より各遺構を見る



西より（4号溝）



南より（7号溝）

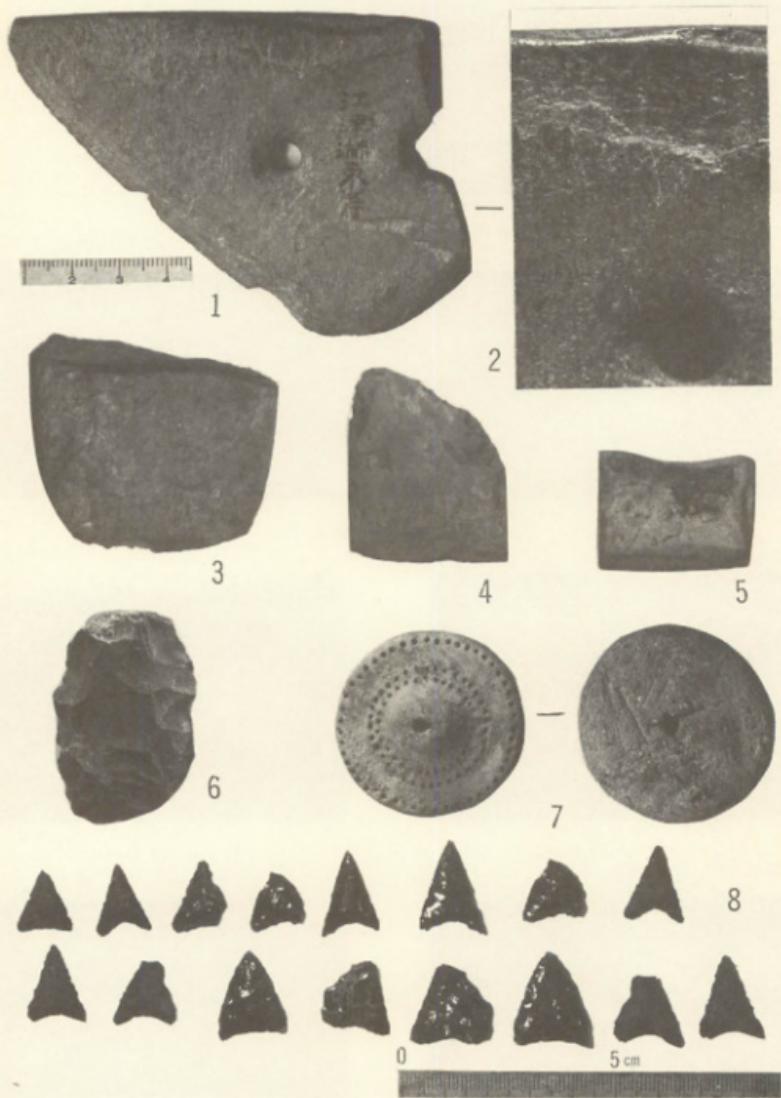


東より



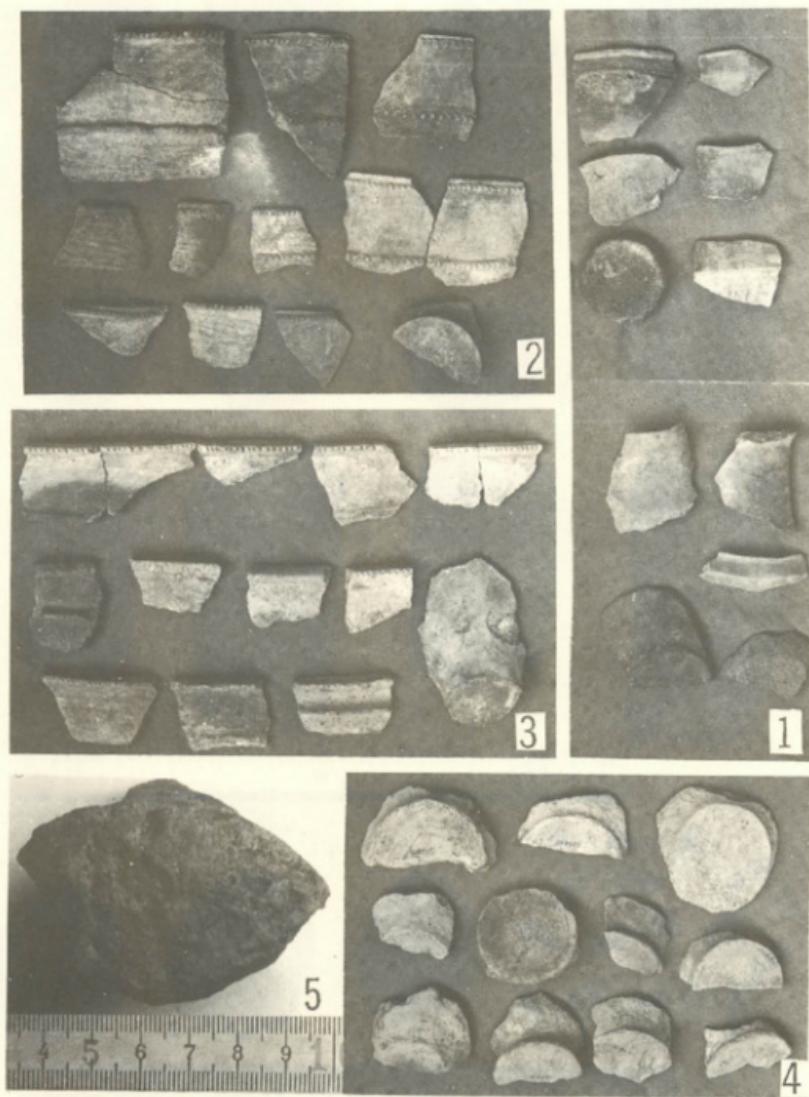
住居址

遺構



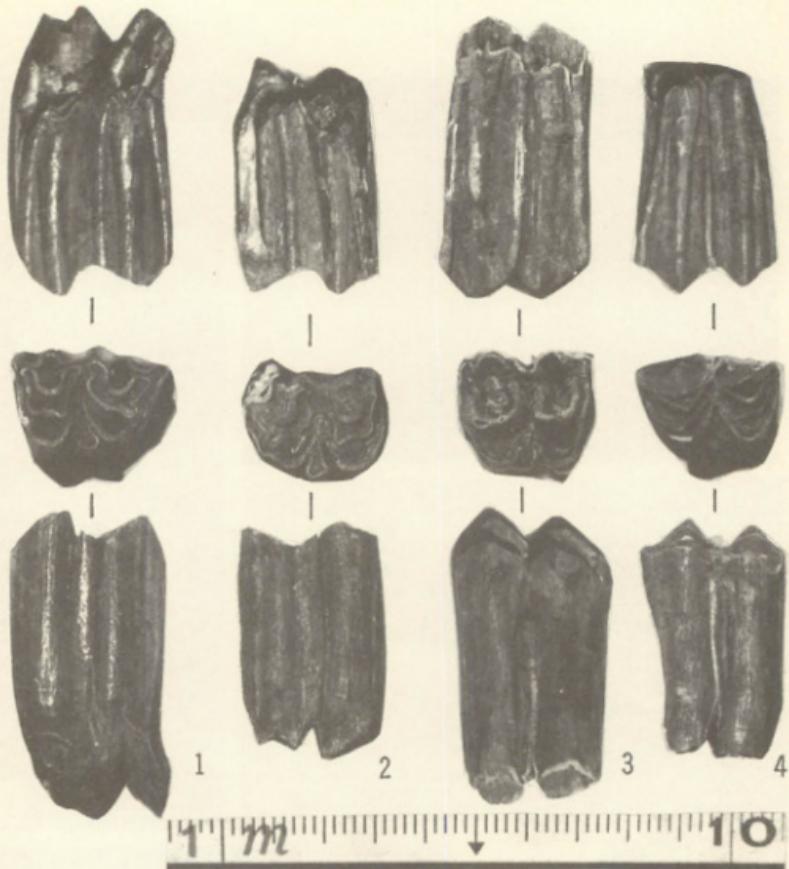
遺物1 石器及び紡錘車

1 三角形石包丁 2は1の部分(ひもずれ) 3 磨製石斧 4、5 扁平片刃石斧
6 スクレーパー 7 紡錘車 8 打製石鏃



遺物2 土 器

- | | | |
|----------|----------|--------------|
| 1 黒色磨研土器 | 2 凸帯文系土器 | 3 亀ノ甲タイプ變形土器 |
| 4 土器底部 | 5 穢底土器 | |



遺物 3 牛歯及び植物種実

1～4 牛の臼歯

1、2はC区 3、4はH区出土

5 まくわうり

6 野桃

調査組織

調査責任者	文化課長	田辺哲夫
現場責任者	文化課参事	緒方勉
調査事務担当	文化課主幹(文化財係長)	村田一美
	文化課主事	西野英俊
	河川課 河川係長	牛島法修
	河川課 技師	上田史郎

あとがき

現場の発掘調査終了後もなく本報告書の入札ということで、愾懥として章立て、割付け、レイアウトをした。また資料整理、推敲に時間が割けず、調査結果を充分生かしきれなかった憾みなしとはしない。

大阪市立大学農学部松本豪先生から本遺跡発見の植物性遺体についての玉稿をいただき、「熊本市健軍町苗代津遺跡出土植物遺体の調査について」として上載することが出来た。ややともすれば単調になりがちな報告書に厚みと幅をもたらすことになり、調査担当者としてよろこんでいる。末尾ながらお礼を申し上げる次第である。また、表紙などに使用した本遺跡の鳥かん写真については、陸上自衛隊西部方面航空隊の協力を得た。

江津湖苗代津遺跡

熊本県文化財調査報告 第15集

昭和49年3月15日発行

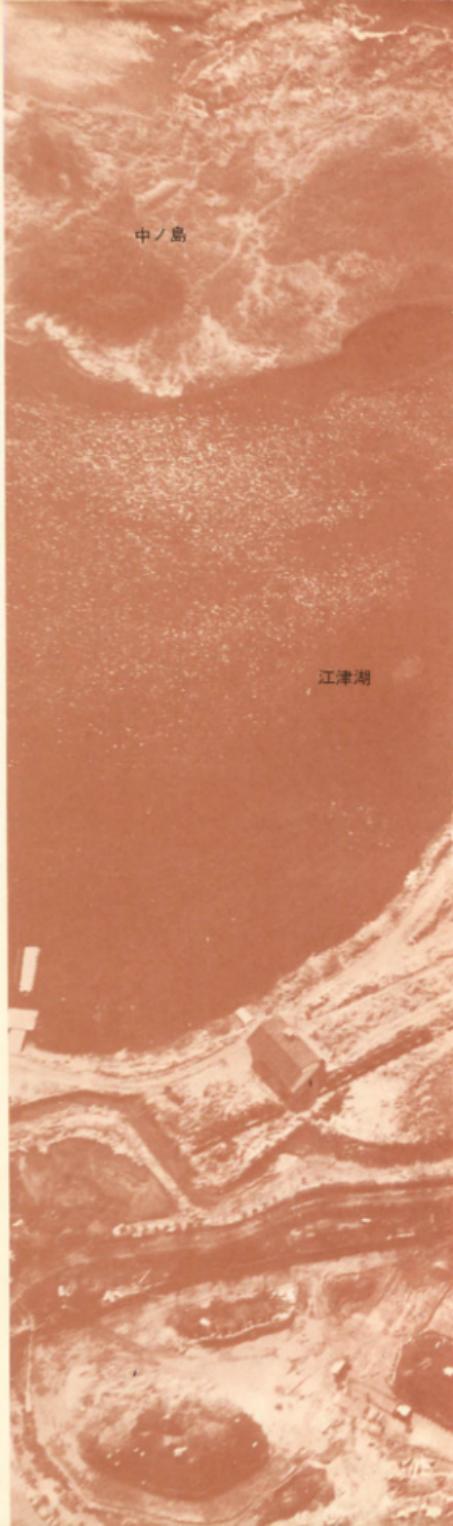
発行 熊本県教育委員会

熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 合資会社 緒方印刷所

八代市通町11-2

中ノ島



この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第15集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：江津湖苗代津遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日